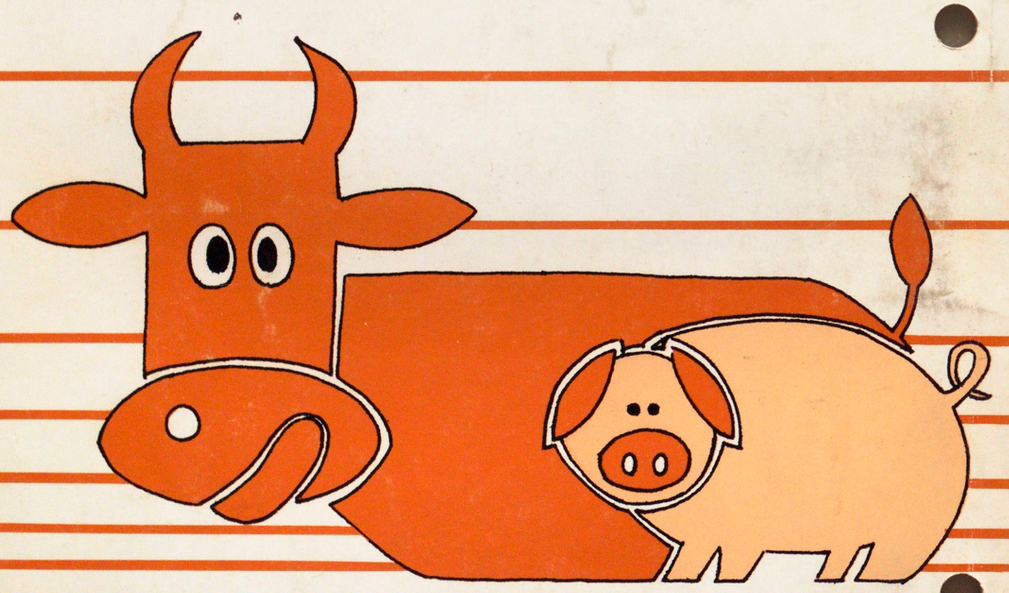
ふじみの



No. 23 1984

東京農大畜友会



厚木農場風景



富士農場実習風景

巻頭言

畜友会委員長　岩渕守男

畜友会機関誌第二十三号「ふじみの」巻頭言に際し、畜友会を代表して一言ご挨拶させていただきます。

畜友会活動は、若人の情熱と行動力とをもって学科の団結、協調、愛科心の発揚にリーダーシップをとる事にその心髄があります。

そのためには、畜産学科に所属する学生自らがまず、畜友会が主旨として掲げる団結、協調、愛科心の畜産精神を理解、認識していただけねばなりません。

畜友会活動一環の場である「ふじみの」を通じ、畜産学科生があらためてこの自覚を高め、畜友会活動の発展を計られん事を私は強く期待いたします。

そして、若人である我々は、諸先輩方が切り拓いて作られた道を安易にたどる事よりも、自ら道を切り拓きながら進んで行かねばなりません。

最後に、悔いのない青春のために畜産学科生の謙虚さと勇気をもって行動されることを期待し、且つ広く親睦と友愛を以って畜産精神の輪を拡げ、大きく飛躍されん事を切に願うものであります。

ふじみの　第23号

目次

巻頭言

畜友会委員長　岩渕　守男　1

御一報

組織体としての畜友会体制の再確立と事業活動の活性化を目指して　畜産学科長　柴田　寛三　4

牛の受精卵移植実用化の現状　教授　石島　芳郎　6

アキノ氏暗殺直後のフィリピンを訪ねて　授授　一戸　健司　11

オーストラリヤの食肉事情　教授　鬼原新之丞　13

ブルネイの印象　助教授　伊藤　澄磨　16

吉村喜彦先生逝去される　18

研究室だより

昭和五十八年度卒業論文題目

家畜育種学研究室　19
家畜繁殖学研究室　20
家畜生理学研究室　22
畜産物利用学（乳）研究室　24
畜産物利用学（肉）研究室　26
家畜飼養学研究室　28
畜産経営学研究室　29
家畜衛生学研究室　31

農場だより

日本人の食肉　講師　小林　茂樹　34

養豚の海外視察をして　講師　鈴木　伸一　35

畜産における衛生管理　講師　佐藤　光夫　37

サークルレポート

～われら農大生～

「責任」　野生動物研究会　61

実習日記　農友会農村調査部　62

東京農業大学農友会村の会の紹介ダ!!　野友会村の会　66

畜友会だより

昭和五十八年度畜友会事業報告　67

昭和五十八年度畜友会会計報告　68

第九十一回収穫祭畜産学科会計報告　69

畜友会を終えて　畜産学科三年　瀬古　真一　70

収穫祭を終えて　畜産学科三年　岩下　文雄　71

収穫祭を通して感じたこと　畜産学科三年　小池　春彦　72

家畜苑を終えて　畜産学科三年　福田　洋　74

昭和五十八年度第九十一回収穫祭役員　76

第九十一回収穫祭報告　77

畜友会役員　79

畜友会規約　80

編集後記　85

優秀卒業論文紹介

昭和五十七年度卒業生優秀卒業論文

学長賞　北海道における酪農家の負債の現状、特に別海町における現状　瀬戸　修　40

別海だより

「農大健児の意気を見よ」

別海実習　畜産学科一年　古田　多美　42

別海実習（出逢と別れ）　畜産学科一年　中山　昭洋　45

別海実習　畜産学科一年　中島　昭　48

別海町実習を終えて　畜産学科三年　柿沼由美子　51

集う学友

～われら仲間～

無題　畜産学科一年　匿名希望　53

畜産学科一年　農大を愛したスパイ　54

迷える仔羊たちよ走りなさい　畜産学科二年　考える人　55

「母」　畜産学科三年　石川　裕子　56

収穫祭を終えて　畜産学科三年　宮成　修　57

思い出……ボロボロ　畜産学科三年　都築　延吉　59

畜産学科四年　加藤　章　59

御一報

組織体としての畜友会体制の再確立と事業活動の活性化を目指して

畜産学科長　柴田寛三

我々の畜友会も昭和三十五年に発足し、機関紙「ふじみの」の創刊号を翌昭和三十六年四月十日に発行して以来今日まで、ほゞ四半世紀を経過し、「ふじみの」も今回第二十三号を刊行するまでに至った。この間発足当初に比すれば本会の構成員数も非常に増加して、大きな学内学生団体の一つに成長した。この点については誠に御同慶の至りである。

しかしながら今日の時点に於いて本会の現状・内容を冷静且つ詳細に分析して考察するとき、果たして満足して居られる状態であると言えようか。

まず組織体としての畜友会の規範である畜友会々則は一応立派に(?)存在している。これは会社に例えれば商法に定める会社編の会社の定款に相当するものである。しかし本会会則に定められた通りに果たして本会が現実に運営されているだろうか。また本会の執行

機関たる役員の選出が、民主々義社会（団体）での最高の意思表示方法である会員の公正且つ自由な行動による選挙によって行われていると言い得るであろうか。現代学生気質の通弊としての成るべくなら責任ある仕事にはタッチしたくないと云う気持もある程度理解出来ないわけではないが、昭和五十九年度役員選出の状況を具さに観察・思考する時、誠に憂慮に堪えないところである。

次に本会の会計についてであるが、先日の総会に於いて、顧問として本会の会計処理に関する種々の反省・改善すべき点について指摘して置いたが、通常の団体等に於いては到底通用しないであろう事項は速急に改善し、会員より納入された貴重な会費に基づく会計である原点に立戻り、会費の有効支出に役員一同は留意すべきである。

最後に本会の目的を達成するために行う事業活動についてであるが、現在の活動はマンネリ且つ安易化してはいないだろうか。此際役員は本会の事業活動の内容について抜本的に再検討すると同時に、会員の真に意のある所を扱取り、新機軸を創出すると共に、現行の継続的事業活動の対象範囲を学外にも広く求め、本会の今後に向って飛躍する年になる様期待するものである。

畜友会講演会から

牛の受精卵移植実用化の現状

家畜繁殖学研究室
教授　石　島　芳　郎

本日、お話しようとしておりますことは、牛の受精卵移植実用化の現状についてであります。ご存知のように牛の受精卵移植そのものは昔から研究されていた訳ですが、今日、それが世界各国で実用化に入ったという状況にあります。今その最先端ではどのような形で行なわれているのか、どんな技術が用いられているのか、時間の許すかぎり紹介していきたいと思います。

受精卵移植とは

家畜の場合にいう受精卵移植とは、一つの雌の生殖器官より受精した卵（胚）を多数外に取り出し、これらを他の雌個体の生殖器官（子宮）に移植して子にしようとする技術をいいます。つまり借り腹によって目的の雌の子を沢山得ようとする方法です。欧米ではエンブリオ・トランスファ（Embryo Transfer）、略してE・Tといっています。最近、E・Tという映画が話題になって、そちらのE・T（地球外生物）の方が有名になってしまいましたが、畜産の方のE・Tも略語としてはすでに定着しています。アメリカやカナダでは受精卵移植で生まれた牛をE・Tカウ（Cow）というほどです。

受精卵移植のねらいどころ

牛の受精卵移植というのはどんなところにねらいがあるかというと、北大の金川先生は表1のように利点を十

表1　受精卵移植の利害得失

利　　点
1. 家畜頭数の増加（双仔，多胎にも応用）
2. 家畜資質の向上
3. 家畜改良期間の短縮
4. 特定品種・系統の増産
5. 良遺伝質の保存（卵の凍結保存）
6. 稀動物の保護
7. 輸送費軽減（家畜の代りに受精卵の輸送）
8. 不妊・繁殖障害の究明に役立つ
9. 生物・医学研究面に貢献（受胎と免疫，胎児と環境）
10. 家畜繁殖学の国際協力（国際間受精卵輸出入）
欠　　点
1. 複合された高等技術が必要
2. 研究段階が多い
3. 経済的に高価
4. ホルモン使用の悪影響（アンチホルモン産生）
5. 手術による損傷（手術創，癒着，麻酔死）
6. 難産の危険性（大型種→小型種へ移植）
7. 特定品種への偏り
8. 動物愛護・反自然的考察
9. 人為的不正の可能性
10. 登録が複雑（血液検査）

（金川，1980）

項目ほどあげています。目下、実用状のねらいとしては㈠特定品種の増産、㈡卵を二つ移植することによる双子生産というところにあります。そして本来ならば一番最初にこないといけない家畜の改良増殖というのが、実用化の段階では三番目にきているところは面白いことだと思います。

牛の受精卵移植の企業化の歴史

牛の受精卵移植はいつから行なわれたかというと、研究上は、一九五一年にアメリカで実施されたのが最初です。受精卵を移植するための会社ができ、お金を取るようになったのは、一九七一年、今から十三年前のことです。最初の会社は、カナダのアルバータというところにアルバータ・ライブストック・トランスプラント社というのがつくられています。同国には翌年、モダン・オバ・トレンド社という専門会社ができました。アルバータは移植会社発祥の地なので、今も三、四社あります。モダン・オバ・トレンド社は日本人と大変関係の深いところで、北大の金川先生はこの会社の研究部長・生産部長を歴任しました。現在、金川先生は北海道における受精卵移植の指導者であります。

現在、世界中でどれくらいの会社があるかというと、実際には出来てはつぶれ、また出来るといったぐあいではっきりした数はわかりませんが、私の知っているだけでも三十近くあります。カナダに五社、そのうちアルバータに三社、オンタリオに二社あり、モダン・オバ・トレンド社はオンタリオにあります。アメリカには沢山ありますが、私の知っているだけで十一社あり、カーネーション・ジェネティク社、CBRオバ・トランスプラント社などが有名です。

オーストラリアでは、ローランド・シャロレイズ・オーストラリア社という会社が一九七二年に初めてつくられ、その後いくつかの会社ができています。オーストラリアも日本人との縁の深いところで、当初、日大を出た小林氏がローランド・シャロレイズ・オーストラリア社で活躍しました。氏はその後、タスマニア・トランスプラント社を経て、現在、エンブリオ・トランスファ・サービス・オブ・オーストラリア社のオーナーになっています。氏は年間六〇〇頭もの移植を手がけているそうです。ニュージーランドには二社、イギリスにはファーマーズ・ライブストック・サービスという名の会社があります。この他に、アルゼンチンにもあるそうです。

企業化の背景

次に、企業化の背景ですが、これは牛の輸入制限と大きなかかわりがあります。ご存知のように、カナダ、ア

メリカ、オーストラリアなどでは牛の輸入に対してきびしい制限をしています。アメリカでは、口蹄疫の関係でヨーロッパからの直接輸入は禁止されています。カナダはヨーロッパからも数の制限つきで輸入ができるそうですが、一年近くの検疫が必要です。オーストラリアもヨーロッパからの直接輸入は禁止されていて、ニュージーランドを介してしかヨーロッパ牛を手に入れることができません。このような措置がとられているために、肉牛改良に必要なヨーロッパの品種が高値で取り引きされることが背景にあります。

一方、イギリスは各国に直接牛を輸出することが困難なために、牛の受精卵を凍結して、卵で輸出することを考え凍結卵に力を入れており、すでに販売会社がいくつか設立されているといわれています。

日本での実用研究は、一九六四年に農林省の杉江技官が世界にさきがけて、非外科的移植法を開発したのをけいきに活発に行なわれており、技術は世界のトップレベルにありながら、外国とは飼養規模のちがうこともあって実用化にはいたっていません。

受精卵移植技術の成り立ち

次に、受精卵移植の技術ですが、人工授精がいくつかの技術が複合されているのと同じように、いくつかの技術から成り立っています。

先ず、優良あるいは増産したいと思う雌牛から多数の卵子を得るための過排卵誘起法、次に、卵子を移植する場合に卵を提供する側と卵を受ける側の性周期を一致させるための性周期の同期化法、卵を外に取り出すための採卵技術、取り出した卵の取り扱い、輸送あるいは保存の技術、それに、成功率の高い卵子移植法などでありまず。手順は、供卵牛（ドーナー Donor）に過排卵処理をして発情時に人工授精し、次いで採卵、一方、発情を合わせた受卵牛（レシピエント Recipient）を用意して、ドーナーからの卵を移植し、出産をまつということ

表2　受精卵移植技術の各段階

内　　容
1.供卵牛の選択
2.供卵牛の検査（健康状態，生殖器）
3.供卵牛の性周期の確立（発情発見と記録）
4.供卵牛に対する過剰排卵処置（ホルモン投与）
5.供卵牛の発情と人工授精
6.受卵牛の選択
7.受卵牛の健康管理，性周期の確立
8.受卵牛に対する発情同期化
9.供卵牛に対する卵回収術
10.回収卵の検査，分類，取扱，保存
11.受卵牛に対する回収受精卵の移植
12.供卵牛及び受卵牛に対する回収及び移植処置後の管理
13.受卵牛の妊娠診断（40～45日後）
14.妊娠受卵牛の管理及び分娩
15.新生犢の登録
16.非妊娠受卵牛の処分

（金川，　1980）

になります。これが基本的な型でありますが、その過程にはもう少しいろいろなことが入ります（表2）。

各技術の現状

受精卵移植技術の各段階について、主なものについて現状を述べてみましょう。

過排卵誘起は、今までＰＭＳとＨＣＧを注射するか、ＦＳＨとＬＨを注射する方法がとられていましたが、ＦＳＨは値段が高い、ＰＭＳとＨＣＧの組合わせは反応にバラツキがあるなどから、現在はＰＭＳとＰＧＦ2dの組合わせが一般に使われるようになっています。先ずＰＭＳを注射します。すると卵胞が発育してきます。そのときＰＧＦ2dという黄体退行作用のあるホルモンを注射しますと、前からある黄体は退行し、ＰＭＳに由来して発育している卵胞に影響がないので、二日位すると発情がきます。そのときにＨＣＧは注射しないで人工授精をします。そうすると反応に個体差はありますがかなりの受精卵が得られることになります。昔は一頭からできるだけ多くの卵子を取るよう努力していましたが、あまり多いと移植作業がかえって大変になるため、今は五～十個取れればいいという考えになっています。ＰＭＳとＰＧＦ2dの方法はその点ちょうどよいようです。

採卵は、今までは開腹手術をして子宮を洗う方法が一般の企業で使われてきましたが、これでは一回一回開腹する手間がかかるために、現在は膣を経て子宮頸管に管を入れ非外科的に洗う方法が利用されています。この方法で回収率は六〇～七〇％ぐらいだそうです。

卵の取り扱いの中で特に注目されている卵の凍結保存は、現在、マイナス一九六度Ｃの液体窒素に二～三時間かけて緩慢に凍結させる方法で牛はもとより、山羊、めん羊にまで成功しており、正常な子を得ています。最近は日本でもやられています。ただまだ凍結融解卵の移植成績は良くありません。これが完全に実用化されれば、ドーナーとレシピエントの性周期の同期化が必要なくなり、また卵の輸送が容易になりますので、受精卵移植の普及に大いに寄与するのですが、この技術だけはまだ未完成といってよいでしょう。

凍結卵が完全でないので、現時点、企業ではレシピエントの性周期の同期化が必要ですが、これにはＰＧＦ2dによる発情同期化法がそのまま応用されています。

受精卵移植の技術は、一般にはまだ外科移植つまり開腹するか臍部を開いて子宮に移植する方法が取られています。この方法だと受胎率は条件さえよければ八〇％以上の成績が得られます。しかしこの方法では手術という手間がかかります。ですから最近は手術をしない方法、すなわち非外科的移植法が注目されていて、一部ではこ

の方法が取り入れられていますが、受胎率は五〇～六〇％と低く、外科的方法に及びません。それでも、人工授精の精液注入法と同じようにストローに卵を入れて移植する方法がいくつかの会社でためされています。

詳しいことは、スライドで説明することにします（以下、術式の概要をスライドで示したが、ここでは省略させていただく）。

おわりに

今後、受精卵移植が卵の研究と相俟ってくると、性鑑別した卵を移植して性のコントロールができますし、マイクロマニピュレーションによる人為的一卵性双子の作出も簡単にできるようになります。また、地道に牛の改良に応用すれば、雌の資質を入れた改良ができ、今日以上に改良が進むことになります。

ただ日本で受精卵移植が本当に実用化できるかどうかは、まだ何ともいえません。現状の受精卵移植は、レシピエント一頭当り、二〇万～四〇万円かかるのが世界の相場です。こんな高くては日本では普及は無理でしょう。それと日本の場合は、諸外国のような特定品種の増産にはそれほどメリットはありません。

日本で考えられる方向としては、和牛の生産に応用することが一つあります。この場合、レシピエントはいらなくなった牛を使うのではなく、一般農家のホルスタインを使うのです。ホルスタインに人工授精した後、空いている側の子宮に和牛の卵を移植するのです。得た和牛の子は和牛卵提供者が引き取り、農家には借り腹代を払うのです。これだと農家は自分の牛を繁殖した上え、いくばくかのお金が入ります。和牛の持主はふやしたい系統の子を容易に沢山得られます。これならペイしそうです。

岡山和牛試験場の小田さんはこの研究をしています。実際にこのようなことができるかどうかは、胚を追加移植した論文がすでにいくつかありますので、だいじょうぶだと思います。ちなみに、日本でもホルスタインは移植で得られた子も登録できるようになっています。和牛はまだです。

現在は、まだいろいろな問題があって、実用化にほど遠いのが日本の現状ですが、もうちょっと時間がたてば方向が決ってくると思います。きっと人工授精がそうだったように、受精卵移植もあたりまえの時代がいずれはやってくると思います。

（この稿は、一九八二年七月七日に開催された畜友会講演会の録音テープから採録したもので、若干の修正を行なってある。採録にあたってご協力いただいた研究室の小野寺政一氏に感謝する。）

アキノ氏暗殺直後のフイリピンを訪ねて

家畜繁殖学研究室
教授　一戸健司

昭和五十八年八月二十一日午後一時七分、フイリピン共和国野党の指導者アキノ氏が中華航空八一一便がマニラ国際空港に到着した直後、暗殺されると言ういともショッキングな事件が勃発した。

度重なる戒厳令、上下・貧富の格差が年毎に顕著になって来たこの国の実状に接するにつれ、一見極めて開放的でのどかではあるが何処かに危険性をはらんでいる様に思われたこの国に、遂いに一つの転換期が訪れた様に思われた。

日本のテレビや新聞には当時アキノ氏と同乗していたと言う日本人記者の証言が連日の様に報道され、一方フイリピン政府のこの暗殺に関する報道は謎に包まれた様な抽象的な物ばかりで、これ等両者間の矛盾は日が経つにつれて拡大されて行った。こんな次第で九月十四日の出発時には一種の緊迫感さえ抱いてマニラへと出発した。

マニラ空港には何の変哲もなく、マリアーノ・マルコス大学からは副学長のアトニー・ブランコ氏と、数年来の知己であるノエル・アラマダがにこにこと笑いながら私達を出迎えた。まるで何事もなかったかの様に。ところが副学長は開口一番「あなた方はアキノの事件を知っているでしょう。どう思いますか」と質問した。マリアーノマルコス大学と言えばマルコス大統領の父マリアーノ・マルコスが創立した大学であり、その所在地イロコスノート州は大統領の出生地である。私は何と答えてよいか当惑していると、「大変ショッキングな問題ですね」と向うから話しかけて来た。彼等があの記事をスクープしたのが日本人記者である事を知っているだけに、私は「アキノ」と言う名前が二度と出て来ない事を心から願った。果してフイリピンの人達はこの事件をどう考えているのであろうか。

ラオアグではブランコ学長、カヒガル副学長以下多数の職員が、私達が昨年来訪時にした約束通り今回日本鶏（シャモと名古屋）を持参したのでこれに対し心からの感謝の意を示してくれた。こんな次第で僅か一週間の滞在期間に四回「鶏の人工授精」と「野鶏と日本鶏」についての講演とデモンストレーションを実施すると言うハードスケジュールではあったが、彼等の温かい歓迎に包まれていたためかたいした苦痛にもならずあっと言う間

に終ってしまった。

再びマニラに戻り、さて最後のショッピングとなった段階で、九月二十一日私達は「アキノ追悼」の大デモンストレーションにぶつかり、お蔭でデパート、免税コーナーは閉店と言うはめになった。そろそろ事件の余波がやって来たなあと痛感しながらマニラを後にした。

さて最近新聞やテレビで、フイリピンでは反マルコス旋風が次第にエスカレートして来た事が報道されている。去る十一月十七日フイリピンから一ヶ月ぶりに帰国した河野副手は、目下フイリピンでは大学生が中心となり反マルコスの気風が次第に高まっていると言っている。

では何故事件から三ヶ月以上も経過した今頃になって「親アキノ・反マルコス」が次第に台頭して来たのであろうか。それにはその国状を先ず考える必要がある。

この国は七千以上の島から成り立っており、そこに居住する四千万の国民は実に八十以上に及ぶ異なる言語を使って居り、その歴史はスペイン、アメリカ、日本と言って国々に支配されて来たと言う極めて複雑な要因をはらんでいる。彼等にナショナリズムが欠けているとしてもむしろ当然と言ってもよいのではあるまいか。事実異なった地域から来たフイリピン人同士が話しをする場合に、彼等の国語であるタガログ語で話すよりも英語を使う場合が多いのをよく目撃する。歌や踊りを愛し、極めて開放・楽天的な彼等は平気で約束を破る。一部の知識階級を除けば、先ず約束は五十%守られれば上出来であると思えばよい。自然の美しさと常夏の気候、そして食事の間にスナック時間を設けた一日六回に及ぶ休息の習慣は彼等から節度と刺激を滅少させ、又彼等の祖先が受けた被支配の歴史は自立心の欠除を招いてしまったのではあるまいか。こんな背景がせっかちな日本人には考えもつかない体質を彼等に植付けた事と思う。

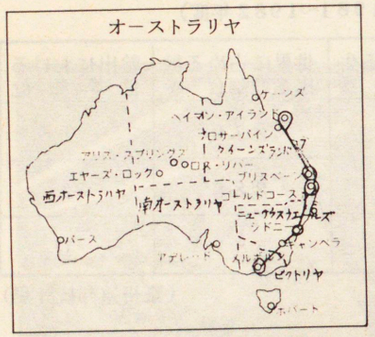
だが然し、彼等にも激しい情熱が温存されている。一度闘鶏場を訪れ、死闘を繰り広げている鶏に対し狂気じみた情熱をそそいでいる老若男女の姿を見るがよい。何かお互いに共通した身近な利害関係、或いは信仰等に目覚めここに結束する事態に直面した場合には、必ずやこの国民は恐るべきエネルギーを発散させる可能性のある事に気付くであろう。

フイリピンではペソが暴落し、昨年九月の訪比時には一ペソが三十円、今年の九月には二十三円、そして十一月には十六円と急激に低下している。この様な事態に直面してはいくら楽天的であっても決起せざるを得ないのではあるまいか。



オーストラリヤの食肉事情

肉利用学研究室
教授　鬼原新之丞



オーストラリヤ連邦、面積は七七〇三、八六七㎢（日本の約二一倍）人口一四二五万（一九七八年推計）、地形は東海岸にかたよって走るオーストラリヤアルプス山脈のために、その西に広がる台地や中央低地は南東貿易風からしめだされて南回帰線をはさんで酷熱した砂漠に占められている。一六八八年イギリス人クックが上陸し、イギリスは流刑植民地として七五〇人の囚人を送り込んだ。彼等が入った東部海岸シドニー附近は豊かな牧草に恵まれた盆地で牧羊を始めた。一八五〇年金鉱が発見されゴールドラッシュ時代を向え、一八六〇年には人口一一五万になり、一九〇一年キャンベラに首府を置き英連邦内の自治領後に独立国となった。オーストラリヤは家畜の大陸と言われ牧畜は最大の産業で羊の頭数は一九八一年、一二七九六、八千頭に達し、牧牛も多雨な東海岸地方に発達し、一九八一年二五、一七〇千頭、羊はビクトリヤ、ニュサウスウェールズ、クインズランド州内陸部に分布、肉牛はクインズランド州の海岸地方に、乳牛はビクトリヤ、ニュサウスウェールズ州の気候温和な地方に分布している。牛肉、羊肉、牛乳はブリスベーン、シドニー、メルボルンなどで、冷凍肉、肉加工品、乳加工品にされ、ヨーロッパ、アメリカ、日本に輸出されている。筆者は昨年十月オーストラリヤを訪ね食肉事情の調査をした。今回は輸出用食肉処理について紹介いたします。

オーストラリヤを空から訪れる人に取って最初に感動する光景は、白々と夜が明けてくると、眼下に見えてくる赤茶けた大地に次第にはっきりしてくる牛、羊の群で、その次に待ち得けているのが着陸時の噴霧器の洗礼である。自国畜産業を守るため入国者に対して消毒に始まり、検疫所での調査、手続があり、悪性家畜伝染病から隔離された大陸を維持するためである。オーストラリヤの畜産業は英国から持ち込まれた四四頭の羊と数頭の牛から

表1. オーストラリヤ畜産物の輸出　（1981～1982年度）

品　目	生産量 百万屯	輸出量 百万屯	世界に占める生産量の割合 %	世界に占める輸出量の割合 %	輸出における世界順位
牛　肉	1.6	0.5	3.0	27.9	1
羊　肉	0.5	0.2	6.6	28.8	2
羊　毛	0.7	0.6	24.8	55.7	1

（豪州連邦統計局）

二〇〇年足らずで表1の如き巨大な成長をした。牛はヘレフォード種がほとんどでその他アンガス、シンメンタール、またこれらの雑種が多く、暑さに強い肉質の良い牛の品種改良が進められているとのことである。緬羊は今では改良され、オーストラリヤメリノー種が主である。

輸出食肉処理工場であるブリスベーンのT.A.Filed Meat Works社と、メルボルンThomas Borthwicks社を訪問した。Filed社は牡牛と去勢牛のみ一日六〇〇頭平均を、Thomas社は牛六五〇頭、緬羊八〇〇頭平均処理しているとのこと、共に処理作業は衛生的な能率良い流れ作業で特に注目されたのは、と殺、剝皮後電気刺戟（Electrical Stimulation）を与える操作をFiled社で行っていた。この電気刺戟は肉質を改善させる操作で、一九七五年ニュージランドで生産されたラムがイギリスに輸入され、これがイギリスのラムより肉が硬かったことから端を発して、オーストラリヤより輸入したラム、牛肉も同じことが見られた。この原因追求の結果、コールド、ショートニングと言う現象であることが明らかになった。これは死後急速に肉温を12℃以下にすると筋肉の収縮が開始され、温度下降と共に収縮は加速される。

この収縮を防ぐためにはと体を少くとも六時間位室温に放置して肉温が急速に低下しないようにすれば良いが肉の目減りが大となり細菌に汚染され、保存期間が短くなる欠点がある。我国のと殺解体からパッケージ迄は牛はと殺24時間後には4±2℃迄冷却され、48時間後には0℃位迄冷却され、それから解体され、部分肉に分けられパッケージされる。よってコールドショートニングは起らないが、オーストラリヤでは牛や羊を圧縮ガンにより殺し、倒れた体の後肢をフックにかけ、放血し、皮はぎ機にて剝皮、内臓を摘出し、半分に切断し枝肉としそのままチエーンで解体室に移動し、チエーンが移動する

間に同一カット専門の人が各部（図1）毎にテーブルに落とし骨抜きされ、カートンに詰め秤量し、重量と工場No.が押され、直ちに冷却される。この太めコールド、ショートニングが起る。よって剝皮、内臓を摘出したと体に図2の如く電流を頭部より足部に流し筋肉に電気刺戟を与える操作を行っている。これにより筋肉の硬くなるのを防止するのと、温と体除骨が容易となり、肉色もよくなる効果も認められているが、未だ各国では電圧及び刺戟時間が研究段階で実用化に至っていないが、オーストラリヤでは実用化していた。この電気刺戟の電圧、刺戟時間を案内の技師は知らないと教えてくれなかった。輸出肉の品質向上に一大努力をしているオーストラリヤの姿を見せつけられた次第である。

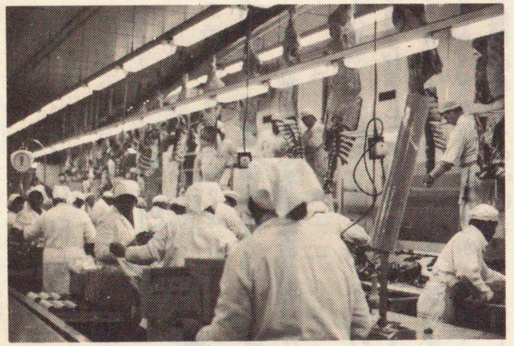


図1

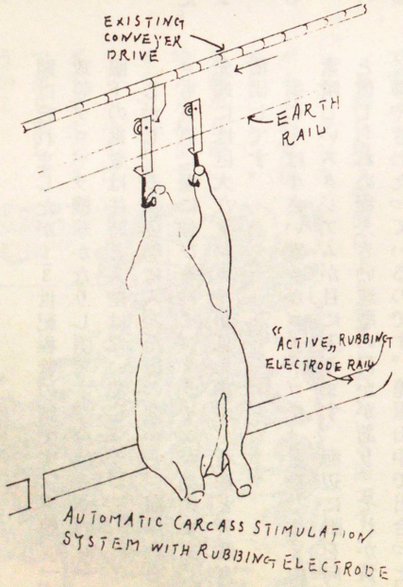


図2

ブルネイの印象

家畜飼養学研究室
助教授　伊藤澄麿

一九八四年、一月一日東南アジアに国家が生れました。ボルネオの中部にある英国統治領のブルネイが独立しました。

九八年九月、インデペンデンシア直前の当地を訪問する機会に恵まれましたので御紹介しましょう。

ボルネオ島と云いますと、私の頭の中に浮かびますのはマングローブが茂る浜辺とか、モクマオーが聳立する不斧の熱帯雨林、その中にオラン・ウータンとかマレー熊等の珍獣が住む所、位の知識しかありませんでした。成田を朝立ち―台北、香港、バンコックの各駅停機の後、夜中にシンガポール着、一泊後、約一時間半の旅でこの国唯一の都市バンダル・セリ・ベガワンに到着しました。

南の国の砂の白地に
鵬翼一路西南指せば
眩(まば)ゆき雲の湧き起る彼方(かなた)
虹の如、波に浮ぶ
椰子茂る沃野

題は忘れましたが1/3世紀程昔の詞です。零戦、一式陸攻等プロペラ機華かなりし頃です。今はA300のジェット。眼下の風景は往時と大差はないでしょう。

しかし、着陸姿勢に入った機の窓から、海岸から何キロも真直に海に伸びるパイプ・ラインが見えます。その先端には巨大なタンカーが見えます。石油と天然ガスの積出しです。

街の中は小さい家々がゴチャゴチャとひしめく中に、素晴しいスタジアムが目に入ります。海辺に眼を向けると信じられぬ程大きい球型の何かがあり、それが黄金色に輝やきわたっているのです。箱根山中で出合った、UFOもその大迫力には玩具としか見えないものでした。

通関後、街へ出ます。上から見た時はゴチャゴチャとしていましたが、実は整然とした街並みです。英国人が作った落着いた美しい街です。住宅街は大家族が住むらしく一様に大きな近代的な家が続きます。面白い事に皆高床式住宅です。御先祖の生活の知恵がそのまま引きつがれています。3～4mの高さの床下には昔は鶏や豚がたむろしていたでしょうが今では、メルセデス・ニッサン・トヨタ等のガレージとなります。

球型の黄金のUFOは建築中のサルタンの宮殿でした。アラビアン・ナイトからそのまゝ抜け出して来て現存しているのです。史上最大のモスク型の宮殿です。取り囲む広い庭は日本の植木屋の分担らしく独立の日まで突貫工事だそうです。後宮を内臓するや、否や、の質問には、ノー・コメントでした。

街の人でほとんどはモスレム国独特の或る尊厳さと、英国風の孤高なものと儒教的な慎ましやかさを混ぜ合せた雰囲気を漂わせています。道をうめつくす自動車の列から暴走音もなく、警笛も聞えない静かなブーゲンビリアが良く似合う文字通り「金持ち喧嘩せず」のただずまいを見せています。

ここの人口は二〇万一千二六〇（一九七八年）とされています。これらの人々が二二二六平方マイル（五七〇〇平方キロメーター）三重県位の面積の中に住んでいる小さい国です。人種構成は56%のマレー人、25%の中国人、その他原住民、外人となります。

労働人口の約七三・三%が軍人・警察官・国家公務とされています。豊かな国です。政府歳入・歳出は（一九七八年）二四六五百万ブルネイドルの歳入に対し、七四三百万ブルネイドルと一七二八百万ブルネイドルの黒字を計上しています。（一ブルネイドル＝一二〇円）

これらはいずれも貿易による黒字です。

例えば（一九七八年）輸入六三九、二百万ブルネイドルに対し四一九五、二百万ブルネイドルの輸出をし、三五五五、九百万ブルネイドルの黒字を得ているのです。その（98%）が原油と云われています。

輸入品は15%食糧、30%工業製品、30%車輌、7%化学製品となります。

輸出の相手国は日本が74%となり最大です。原油・天然ガスが中心です。現に中部電力・関西電力の60～70%はブルネイ産、天然ガスのエネルギーで発電しているのです。

これら地下資源により支えられている国です。

よくシンガポールが東洋のルビーに、香港が真珠に喩えられます。そうすると新生ブルネイはダイヤモンドでありましょうか？



吉村喜彦先生逝去される



東京農業大学教授、農学博士　吉村喜彦先生（畜産経営学研究室主任教授）は、昭和58年8月30日午前5時8分、胃ガンのために川崎市中原区の聖マリアンナ医科大学病院で亡くなられました。享年六十一才。

先生は、3月20日に行なわれた57年度の卒業式後の第4回砂川賞授賞式及びパーティには普段と変わりなく、卒業生と談笑しておりましたが、3月末頃から急激に身体の不調を訴えられ、4月6日に聖マリアンナ医科大学病院に入院されました。入院後、各種検査の上、4月末に手術を受けましたが、既に手遅れの病状で、早ければ2ケ月、長くても秋口までの余命というのが医師の判断でした。5月31日に一旦退院され、6～7月を自宅療養を勤めておられたのですが、8月初めに病状が悪化したため再入院され、19日からは個室に移られていました。

前夜祭及び葬儀は、大和市南林間のカンバーランド長老高座教会で執り行なわれ、故人の遺骨は横浜霊園本郷台キリスト教会墓地に納骨されました。

なお、御遺族の住所は、〒242　神奈川県大和市代官2－12－7

吉村瑞子　殿

研究室だより

家畜育種学研究室

柴田教授、鈴木教授、田中教授、天野助教授



家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝・育種学、特に血清学的、細胞遺伝学的、分子遺伝学的な見地から、広範囲にわたり研究活動が実施されております。

当研究室では鈴木正三教授をはじめ田中一栄教授、天野卓助教授を中心に、大学院生六名、学生四十二名で構成され、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれの目標に向って頑張っております。

研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や毎週行われているセミナーのほかに、卒論等の研究・実験における問題点を解決する為に、昼夜を問わず熱心に討論されております。さらに研究活動は学内だけに止まらず、先生方は学会や研究の為海外に出張されたり、また学生も海外調査や他大学および他研究機関に出向いて研究を行っております。

研究室における年間の主な行事としては、新入室員歓迎会、定期総会ならびに特別講演会、収穫祭への参加、研修旅行（五十八年度は、山梨県営八ッ岳牧場・長野種畜牧場）、卒業論文発表会などがあります。

因みに昭和五十八年度の卒業論文題目は次の通りです。

昭和五十八年度
畜産学科
卒論題目

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ80001	会川　隆裕	わが国のホルスタイン種における統計遺伝学的研究特に血統登録牡牛群の血縁関係について	天野
チ80004	芥川　泰子	霊長類の染色体に関する分染核型の比較研究	田中
チ80009	荒　浩雪	日本におけるイノシシ集団の頭骨からみた地理的変異	田中
チ80012	飯干　真理	タマリンの体外受精に関する研究	鈴木 石島
チ80034	氏原　理	牛血清蛋白質の多型に関する研究	天野
チ80044	大原　雅裕	マウスの初期発生における人工キメラに関する研究	田中 石島

チ80 059 嘉藤 弘子 緬羊の血液蛋白に関する遺伝生化学的研究

チ80 062 木津美由紀 等電点電気泳動法による馬血液蛋白の多型に関する研究 天野

チ80 084 佐藤 公康 高精度分染法によるブタの染色体分析 田中

チ80 086 佐藤 留美 小哺乳類の臓器における雌雄差とその意義 北原・天野

チ80 097 菅野 泰 タマリンの尿中ゴナドトロピンの検出に関する研究 鈴木・石島

チ80 111 竹尾 澄枝 電気泳動変異によるスイギュウ属の分類 天野

チ80 113 立田 一 東アジア在来牛の類縁関係に関する統計遺伝学分析 天野

チ80 116 谷口 進 山羊の血液型に関する研究 天野

チ80 121 津田 新哉 高精度分染法による反芻家畜の染色体分析 田中

チ80 148 臂 吉浩 イノブタの血液型および蛋白多型 田中

チ82 601 井上 正嘉 タマリン3種における自然抗体の検索に関する研究 鈴木

チ82 602 岩井 謙 等電点電気泳動法による馬血液蛋白質型の分析 天野

チ82 607 陳 忠正 同種免疫によるブタ抗血清の作製 田中

チ82 608 道解 公一 走査型電子顕微鏡による反芻家畜の染色体微細構造の観察 田中

チ82 611 山中 浩美 スイギュウ属およびアノア属の染色体分析 天野

チ79 040 大野 雅美 水牛における精巣の組織学的観察 天野

チ79 064 黒木 義孝 水牛の血液蛋白多型に関する研究 天野

家畜生理学研究室



渡辺教授

畜産学の中で一つの大きな分野を占めている家畜生理学の内容は実に多義にわたっています。その中にあって我が家畜生理学研究室では「家畜・家禽の内分泌生理に関する研究」「家畜・家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究」「家畜・家禽の体液に関する免疫学的並びに血清学的研究」「家畜・家禽の細胞膜に関する研究」の四つを主要テーマとし、それぞれ畜産物の生産向上という畜産学における一大目標に向かって日夜研究に励んでおります。

室員構造は渡辺誠喜教授をはじめとして岩崎、小野、藤田各副手、半沢、井野各院生、四年次生十三名、三年次生九名よりなり、小さな所帯であります。飼育家畜は緬羊、山羊、兎、鶏、鶉、アヒル、と種類も飼育頭羽数も共に豊富であるため、これらの日常管理に大変苦労することもありますが、その半面これら動物に直接接する機会が多く、学生室員自身の経験から多くの事柄を学び取ることができて非常に有意義であり且つ楽しいものがあります。室員の構成人数が比較的少ないため学生一人一人の存在が大きく、且つ重要なものとなっており、それだけに自分というものを出していくことのできる研究室だと思います。

研究室の年間行事としては、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会などを行なう一方、年間を通じて週一回の室員によるゼミナール及び談話会、学外講師による特別講演会、富士農場実験実習などがあり、これらの成果を室報にまとめて発行しております。

卒業論文題目

チ80 038 大澤 真理 ウズラの血漿タンパク質の多型について 渡辺

チ80 053 柿沼 俊美 アヒルの肉漿及び赤血球における2・3解糖系酵素のアイソザイムについて 渡辺

チ80 056 片岡 貴美 ウズラの多量体免疫グロブリンについて 渡辺

チ80 085 佐藤 英雄 矮性鶏におけるアルカリ性ホスファターゼについて 渡辺

チ80 105 高田 肖子 馬赤血球中の遊離アミノ酸について 渡辺

チ80 112 田子 秀行 家禽の肝RNAに関する比較免疫学的研究 渡辺

チ80 122 堤 啓介 2・3種動物血清アルブミン及び免疫グロブリン（IgG）の抗原性の比較 渡辺

チ80 158 本間 信行 筋ジストロフィー鶏の肉漿蛋白質について 渡辺

チ80 171 室井 新一 ウズラ血清タンパク質の個体変異並びに加齢産卵に伴うトランスフェリン量の変動 渡辺

チ80 172 室賀 聡 各種鳥類の羽毛蛋白における多型に関する研究 渡辺

チ80 184 山崎 由起 緬山羊におけるIgA及びIgGの移行について 渡辺

チ80 194 岡本 琢二 赤血球膜の性状に対する性スロイドホルモンの影響 渡辺

畜産物利用学（肉）研究室



鬼原教授、松岡講師



我が、畜産物肉利用学(肉)研究室、肉研は、鬼原新之丞教授、松岡昭善講師のもと、4年生33名、3年生16名で構成されている。日本国内における動物性蛋白質の供給に関する研究を指名としている農大畜産学科において、畜産物を直接、消費者のもとへ最終的仕上げをしてとどけるための食肉加工に関する諸問題を扱っている研究室である。4年生は卒業論文としこれらの研究にとり組み、3年生はこの手伝いを主としている。

このように食肉加工に関する研究を基盤としている肉研であるが、我々がしだいに社会人へと成長していく今の段階において、すでに個々おのおのの意見の相違も大きく、個人同志の主張が複雑に影響しあい、集団としての運営が簡単明瞭であるとはいえない。また、ここで室員としての責任もはたされなくてはならないのであるからさらにこの問題は複雑である。

収穫祭において例年、肉研ではロース・ハム、スモークド・チキン等の製造、販売をしているが、この機会がこれらのことに重要な意味をもっている。収穫祭での注文数は膨大で材料の仕入れ、製造・販売・会計とそれぞれが各係に分担される。これらの作業の中でも特に製造は夜を徹して行われるために重労働である。各個人は係に責任をもち、存在を意識し行動し、作業を完成させなくてはならない。つまりここで、肉研の室員として皆の意識が高まり、集団としてまとまりができるようになる。さらに作業、うちあげを通し互いに深く知り会えるようになる。肉研においては、そのまとまりが特によいと言えるのではないだろうか。

また、肉研の雰囲気として、4年生・3年生の区別が明確にされることは普段それほど重要ではない、互いにいつもわきあいあいである。酒宴の席においてはなおさらそうである。新しい年度の肉研においてもこの雰囲気はぜひこのままでありたい。

これから将来も以前に増して、これらのことを基盤として学習心旺盛に、活発に、室員としての意識高く、食肉加工についての研究を発展させ、日本畜産におけるすばらしい成果を生むよう、日夜、励んでいくであろうと思っています。

卒業論文題目

チ80016 位下 通 混合ソーセージの保存性向上に関する研究 鬼原

チ80031 岩間 陽 と殺前のストレスが鶏肉質に及ぼす影響 鬼原

チ80039 大田 伸子 燻煙ブロイラー肉の冷蔵保存中の品質変化に関する研究 鬼原

チ80040 大竹 夏子 肉製品の風味、ならびに保存性向上に関する研究 鬼原

チ80042 大沼 好幸 鶏肉の品種差、性差、年令差ならびにと殺前の処理による硬さ粘弾性の変化について 鬼原

チ80046 岡田 嗣穂 生ソーセージの品質ならびに保存性に関する研究 鬼原

チ80064 久下 彰彦 マスタードのソーセージ添加の影響について 鬼原

チ80066 国本 洋 生ハム冷蔵保存中の変化に関する研究 鬼原

チ80077 小林 宏之 植物性脂肪添加ソーセージに関する研究 鬼原

チ80078 近藤 菊郎 ブロイラー筋肉脂肪ならびに貯蔵脂肪の脂肪酸分布 鬼原

チ80080 斉藤 隆吾 植物性脂肪添加ソーセージに関する研究 鬼原

チ80081 坂本 洋 生ハム凍結保存中の変化に関する研究 鬼原

チ80087 塩田 浩 ホロホロ鳥筋肉脂肪ならびに貯蔵脂肪の脂肪酸分布 鬼原

チ80089 下畑 啓 豚肉の再凍結に関する研究 再凍結処理の解凍条件が肉質に及ぼす影響 松岡

チ80095 白土 隆介 Fresh mixed sausage の品質ならびに保存性に関する研究 鬼原

チ80118 田盛 靖人 醱酵飼料の給与が豚肉質に及ぼす影響 松岡 鈴木(伸)

チ80120 辻 秀文 醱酵飼料の給与が豚肉質に及ぼす影響 松岡 鈴木(伸)

チ80123 恒松 速男 各種塩漬法が燻煙鶏の品質によぼす影響 鬼原

チ80124 鶴原 文子 燻煙ブロイラー肉の冷凍保存中の品質変化に関する研究 鬼原

チ80125 寺川 美加 燻煙鶏肉の冷蔵保存中の品質変化に関する研究 鬼原

チ80140 萩原 徹 廃鶏肉の利用に関する研究 鬼原

チ80146 坂東 弘之 豚肉の凍結貯蔵に関する研究 凍結貯蔵温度の差が再凍結肉の肉質に及ぼす影響 松岡

チ80150 深沢 剛 豚肉の凍結貯蔵に関する研究 凍結貯蔵温度の差が再凍結肉の肉質に及ぼす影響 松岡

チ80161 松尾由紀子 醱酵飼料の給与が豚肉質に及ぼす影響 松岡 鈴木(伸)

チ80166 萬代 一成 豚肉の再凍結に関する研究 再凍結処理前の解凍条件が肉質に及ぼす影響 松岡

チ80180	矢島夫美也	鶏肉ソーセージの保存中の変化に関する研究
チ80186	横尾　雄治	Hamの貯蔵中、脂肪の変化およびpsedoasingの影響
チ79062	工藤　真弘	鶏肉ハムのテクスチャー並びに保存性に関する研究
チ79087	鈴木　和哉	ボンレスハムのcuringに関する研究
チ82606	周・　仲光	Sausage貯蔵中、脂肪の変化におよぼすcasingの影響
チ80098	杉崎　正尚	鶏肉の品種差、性差、年令差ならびに殺前後の処理による硬さ、粘弾性の変化について
チ80103	瀬川　一也	鶏筋肉の解凍硬直に関する研究
チ80145	春田　臣一	生ソーセージ凍結保存中の変化に関する研究
	則武　新吾	各種魚肉配合、混合ソーセージの品質に関する研究



畜産経営学研究室

桜井教授、石岡講師





最近、新聞・ニュース等を賑わせている牛肉輸入自由化問題・採卵鶏ヤミ増羽問題など畜産の社会的立場が、問われている中で、畜産経営学は急速に伸び続けている。

そんな中で学科内唯一の社会科学研究室である我が畜産経営学研究室は、畜産分野の最先端をめく学問として、昨年亡くなられた室長の吉村喜彦教授の遺志を受け継ぎ桜井守正教授、新任の教授、石岡宏司講師の指導の下、大学院生一名、四年生十六名、三年生十二名、一年生一名が研究活動を行っている。

具体的な活動内容は、室員の希望により経営形態別に酪農、肉牛、養豚、養鶏の四班に分かれ、経営及び経済的側面からのみならず、実践的な飼養管理、衛生管理、育種登録等も折り混ぜて研究を進めている。更にこれらを統一した週一回の全体ゼミ、そのほかにも簿記ゼミ、飼料と牛ゼミ、コンピューターゼミ、経済ゼミ及び原書ゼミが行われており多彩なゼミを揃え研究活動を自主的に行っている。

机の上以外の活動としては、夏期休業中の実習、収穫祭の文展・模擬店への参加、ソフトボール大会への参加、春と冬の研修旅行等があり横の結束を固めている。

これからの研究室の目標は、自主性を全面に押し出し自らの研究心の向上を目指して研究室の発展を図ってゆきたいと考えている。

卒業論文題目

チ80017	石井　貞良	千葉市における酪農の現状と問題点及び展望
チ80021	石渡　慶太	遠隔地酪農と近郊酪農との収益性の比較
チ80065	草別　行天	畜産物輸入ワク拡大がおよぼす日本畜産への影響について
チ80068	黒木　芳照	ブロイラーインテグレーションにおける現状と問題及び展望
チ80073	国分　隆之	酪農経営の現状と展望
チ80074	小崎　智夫	宮崎県都井岬の野生馬の現状と展望
チ80079	今野　嘉久	外国依存による日本の穀物自給率低下に関する研究
チ80092	清水　亀雄	日本における軽種馬の生産経営
チ80096	末岡　淳一	山口県における養鶏の現状と展望
チ80099	杉本　哲康	静岡県におけるブロイラーの流通問題及び展望
チ80100	鈴木　慎児	日本における肉牛経営の現状と発展性について
チ80109	瀧澤　則夫	戦前から現在における養蚕形態の変化
チ80115	田中　隆行	豚肉の歴史と現状
チ80726	冨岡　雄二	豚肉流通における輸入肉の問題
チ80128	富田耕太郎	鶏肉価格に関する流通問題
チ80134	永廣　祐輔	食肉流通機構の現状と今後の課題
チ80139	野別　修	宮崎県日向市における和牛生産の現状と展望
チ80143	花井　徳康	福島県相馬地方における養豚の歴史とその将来性
チ80157	細野　勉	岩手県における肉牛飼養の現状と展望
チ80160	増田　和夫	鶏卵の需給に関する研究
チ80176	森岡　伸司	山口県玖西地区における粗飼料生産と自給率の展望
チ80177	森田　栄一	日本在来馬に関する研究
チ80187	吉井　泰	コンピューターによる採卵鶏の生産管理に関する研究

チ80188 吉澤 寛 飲用乳の流通に関する研究 石岡
チ80190 若林 亜也 我国における牛肉輸入問題に関する研究 石岡
チ80192 渡辺 恵一 LL牛乳の常温流通実現化に伴う生産及び消費面の動向とその展望 石岡
チ80195 笠野 浩一 種豚経営の現状と展望 石岡
チ80197 林 靖記 今後の我国における緬羊肥育についての研究 石岡
チ79120 豊岡 智 栃木県氏家町におけるホルスタイン牛の肥育経営分析 石岡
チ79129 沼田 文宏 栃木県那須町における観光牧場の経営に関する研究 石岡

家畜繁殖学研究室

一戸教授、石島教授、門司講師



「試験管ベビーの誕生」これは、単に人間だけの話題ではないのです。家畜においてもその技術は、実験段階から実用段階に入っているのです。そんな中にあって我が家畜繁殖学研究室では「家畜の繁殖生理に関する研究」「家畜の人工授精に関する研究」「家畜の性現象の人為支配に関する研究」の三つを主要テーマとし、幅広い研究活動を行っています。

本研究室は、一戸教授、石島教授、門司講師、河野副手の御指導のもとに、大学院生一名、四年生二十七名、三年生三十五名の室員で構成されています。室員は、六十三名と大人数ですが実際は、各自の希望する動物別に家禽班、牛班、豚班、実験動物班の四班に分かれて、それぞれ個々の役割分担のもとに各動物の飼養管理を行っています。

また、各班別に分かれ週一回のゼミナールがあり、繁殖技術並びに基礎知識の修得に励んでいます。

更に、当研究室においては、広く海外にも目を向けており、近年ではフィリピン・スリランカなど東南アジアにおける野鶏及び水禽類の研究が毎年行われ室員を外地に派遣し、野鶏及び在来鶏、水禽類の生理を繁殖学的に究明せんと日夜努力を積み重ねています。

この様な活動の他に、収穫祭、ソフトボール大会等にも積極的に参加し、エネルギッシュな活動を続けると共にコンパにおいては他に例を見ないほどの盛り上がりをみせています。

研究的な立場の中に基礎を置き、そこに集う学生達の舞台が家畜繁殖学研究室なのです。

卒業論文題目

チ80003 青野 文仁 冷涼地夏山放牧牛の繁殖方法とその成果 一戸 小林
チ80015 池田 泰男 牛および水牛精子の形態学的研究 門司 丹羽
チ80022 板橋 正憲 豚精液の凍結保存に関する研究 門司 丹羽
チ80023 伊東 壮 岐阜地鶏の換羽期における血中性ステロイドホルモンの推移について 一戸
チ80025 伊東 芳晴 豚精液の低温保存に関する研究 門司 丹羽
チ80028 井上 弘美 プロスタグランシン$F_2\alpha$アナログによる過剰妊娠マウスの分娩誘起に関する研究 石島
チ80045 岡 圭一 飼育下におけるホンドタヌキの生態（おもに採食行動と食性及び糞内容物について） 一戸 北原
チ80047 小形真紀子 家畜精液の化学的組成に関する研究 門司 丹羽
チ80050 織田 充裕 水牛精液の凍結保存に関する研究 門司 丹羽
チ80054 葛西 尚美 ラットにおける受精卵の非外科的移植、特に子宮深部移植について 石島
チ80070 桑山 岳人 岐阜地鶏の就巣期並びに育雛期における血中性ステロイドホルモン濃度の推移について 一戸
チ80083 迫 信一 豚精液の凍結保存に関する研究 門司 丹羽
チ80088 宍戸 寿 卵胞膿腫牛における卵胞壁の組織学的研究 一戸 吉田
チ80093 下田 吾治 豚精液の低温保存に関する研究 門司 丹羽
チ80117 種市衣里子 スナネズミの過剰妊娠に関する研究 石島
チ80119 塚本 永和 乳牛（ホルスタイン種）における分娩態様について 一戸 萩原
チ80153 藤野 浩紀 雄日本ウズラの加齢に伴う生殖能力の変化に関する研究 一戸
チ80159 増尾 利行 卵胞膿腫牛の卵胞壁微細構造について 一戸 吉田
チ80162 松岡 哲也 PMSによる家兎の過排卵誘起におけるEstradiolおよびLH-RHの影響 石島
チ80164 的池 徹 パンダウズラの生育と繁殖能力に関する研究 一戸
チ80168 宮下 幸博 山羊精液の凍結保存に関する研究 門司 丹羽
チ80169 椋本 隆志 PMS応用による家兎の産子数増進に関する研究 石島

チ80 173 室田 喜彦 冷凍地夏山放牧牛の疾病発生と発育に関する調査 一戸 小林

チ80 174 本山 雅彦 産卵鶏の卵胞顆粒膜細胞におけるProgesterone分泌に関する研究 一戸

チ80 178 森田 時夫 牛および牛精液の凍結保存に関する研究 丹羽 門司

チ82 609 中川 進 超音波エコー法による豚の早期妊娠診断について 門司 丹羽

チ82 610 福田 智広 雌鶏の卵胞顆粒膜におけるProgesteroneの分泌に関する研究 一戸

チ78 141 秦 篤史 神奈川県下における豚の分娩状況について 門司 鈴木

チ78 197 渡辺 雄司 豚の繁殖に関する実態調査 門司



畜産物利用学（乳）研究室





山中教授、古川講師

当研究室は、室長の山中良忠教授、古川徳講師両先生の御指導のもとに、副手一名、四年次生十四名、三年次生六名、二年次生二名という少数ながらも室員全員がそれぞれ協力しあい、各自の研究題目に向って日夜励んでいます。

主な研究内容は、乳・乳製品及び卵・卵製品に関する理化学的、細菌学的研究等であり、クリーンベンチ、ガスクロマトグラフィー、液体クロマトグラフィー、分光光度計等が完備され高度な研究を可能にしています。

主な活動は、毎月のゼミナール、五月に新入室員歓迎会、夏には乳製品製造実習、秋には収穫祭参加、冬には室員旅行、二月に卒業論文発表会、卒業生送別会、他に畜友会ソフトボール大会参加等があり、このような行事に、室員は一致団結して活動しています。

卒業論文題目

チ80 007 阿部 啓一 水牛乳蛋白質の泌乳期における電気泳動的変化 古川 大谷 山中

チ80 026 稲田 和稔 家禽卵の機能特性の比較研究 山中

チ80 051 小原 耕 液状ヨーグルト製造法の基礎的検討 古川

チ80 067 熊谷 圭子 各種リパーゼの添加が遊離脂肪酸組成に及ぼす基質特異性 山中 古川

チ80 090 柴崎 由美 家禽卵のβ・N・アセチルグルコサミニダーゼ及びカタラーゼ活性について 山中

チ80 091 清水 薫 家禽卵のα・アミラーゼ及びマンノシダーゼ活性について 山中

チ80 101 鈴木 政彦 濃縮乳から製造したチーズの熟成中における蛋白質の変化 古川

チ80 104 関戸 豊 濃縮乳からのチーズ製造中における乳酸菌数の変化 古川

チ80 108 高松 圭子 ホエー蛋白質の泡立性と添加物の影響 古川 山中

チ80 127 冨沢 篤 H・P・A法によるチーズのプロテアーゼ活性の検討 古川

チ80 167 宮沢由季夫 ホエーの添加が豆乳カードの品質に及ぼす影響 山中

チ80 179 盛田理加子 アルコール発酵乳の基礎的研究 古川 山中

チ82 603 梶山 宏 チーズ熟成中における蛋白質の二次元電気泳動法による検討 古川

チ82 605 重住 暁 水牛乳の泌乳期における脂肪酸組成の変化 古川 大谷 山中

家畜飼養学研究室







杉村教授、伊藤助教授、栗原講師

今日我が国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安全上の要請から配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境の中で、家畜飼養学および家畜飼養学研究室の占める位置は、ますます重要になりつつある。

家畜飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養・管理・飼養という三本柱のもとに、杉村敬一郎教授、伊藤澄麿助教授、栗原良雄講師を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行なっている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼料管理、飼育管理等があり、多方面にわたり行なわれている。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群

馬県畜産試験場、浅間育成牧場に於ける家畜管理実習ならびに、一般飼料成分分析演習等を行なっている。また室員相互の親睦を計るために、収穫祭の文展・模擬店への参加、ソフトボール大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、大学院生四名、四年生二十六名、三年生二十五名である。

卒業論文題目

チ80006 阿住　進　イノブタの発育に関する研究　伊藤　鈴木(伸)

チ80008 安部　元浩　飼料中の不消化物（ポリエチレン）量の相違が幼雛の消化率に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80010 飯塚　一博　麦桿サイレージの化学組成に関する研究　伊藤　栗原

チ80013 五十嵐勝芳　タウリンが鶏の受精率及び孵化率に及ぼす影響　伊藤　西脇

チ80018 石川　澄代　シロネズミ赤血球のミネラル取り込みに対するアミノ酸欠除の影響　杉村

チ80024 伊藤　幸他　ファンシータローの添加量の相違がブロイラーの発育及び消化率に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80032 植木　繁喜　タウリンが幼雛の成長に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80037 遠藤　隆　プレスターターの組成の相違が乳用牡犢の消化率への影響　伊藤　栗原

チ80041 大谷　治雄　飼料中の粗繊維量の相違が成兎のエネルギー代謝に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80044 小澤　真也　飼料中の不消化物（ポリエチレン）量の相違が幼雛の成長に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80057 加藤　章　ファンシータローの添加量の相違がブロイラー生産物の組成に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80058 加藤　智　アンゴラ種（成兎）のエネルギー代謝に関する研究　伊藤　栗原

チ80069 桑子　等　麦桿サイレージの嗜好に関する研究　伊藤　大谷

チ80075 古地　豊　麦桿サイレージの緬羊における消化率の測定　伊藤　栗原

チ80076 小林　則也　イノブタにおける穀類の消化率の測定　伊藤　鈴木(伸)

チ80106 高梨　正夫　プレスターターの組成の相違が乳用牡犢の消化器官発育に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80114 立上　肇　プレスターターの組成の相違が乳用牡犢の発育に及ぼす影響　伊藤　荻原

チ80129 冨田　晃司　飼料中の不消化物（ポリエチレン）量の相違が幼雛のエネルギー代謝に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80131 堂原　千春　アンゴラ種（成兎）における穀類の消化率の測定　伊藤　栗原

チ80156 細川みつ江　麦桿サイレージの調整時における尿素添加が品質に及ぼす影響　栗原　北原

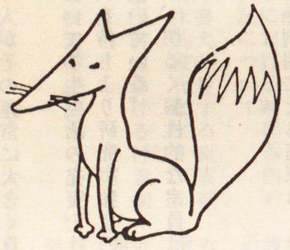
チ80163 松本　仁　動物園における日本カモシカの給与飼料に関する研究　栗原　北原

チ80170 村上　圭司　飼料中の粗繊維量の相違が成兎の消化率に及ぼす影響　伊藤　栗原

チ80175 森　志郎　試作子豚用呼吸試験装置によるイノブタのエネルギー代謝に関する研究　伊藤　鈴木(伸)　栗原

チ80182 山内　明　飼料中の粗繊維量の相違が成兎の消化率に及ぼす影響に特に喰糞を阻止した場合　伊藤　栗原

チ79185 佐藤　秀平　ラット肝初代培養細胞におけるアミノ酸の取り込みに関する研究　杉村



家畜衛生学研究室

近江助教授、渡辺(忠)講師





本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男講師の御指導のもとに、四年生二十九名、三年生二十六名、一年生一名が一体となって活発なる研究室活動を行っている。

研究活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の四班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び、糞尿処理など家畜衛生（家畜、家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜、家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが、主な目的である。）の立場から独自に研究している。

また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活動が行なわれている。

その他研究室の主な行事として、新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加（文化展、模擬店）、親睦旅行、送別会、定例会、ゼミナールなどがある。

本研究員の大きな特色として、室員各自が室員として

の自覚と責任を持ち、一人一人がその運営に大きく貢献していることである。

このように、多面活動において学生生活の充実を計り、各自の個性を引き出し、それを持ちより研究室独自の個性を創造することに目標を置いている。

十一月には新役員が決まり、明るく個性的な室員はますます張りきっている。

卒業論文題目

チ80002 相場 光男 糞尿の発酵熱利用による病原体の消毒に関する研究 近江 渡辺

チ80011 飯塚 正 屋内飼育犬の衛生管理に関する研究 肛門の清拭について 近江 渡辺

チ80014 池田 純 ネズミ(Rattus 属)の内部寄生虫に関する研究 近江 渡辺

チ80019 石津 祐次 鶏の外部寄生虫に関する研究 渡辺 近江

チ80020 石本 真治 哺乳動物の歯牙疾患に関する研究 歯石の付着部位について 近江 渡辺

チ80035 海老原明子 外科的侵襲が豚の血液性状に及ぼす影響 近江 鈴木(伸)

チ80036 江袋 利幸 ホロホロ鳥における鶏伝染性コリーザに対する感受性について 渡辺 近江

チ80043 大野 哲史 ミクロフィラリア陰性犬におけるチアセタルサミド投与後の一般臨床所見並びに血液性状 近江 渡辺

チ80048 奥平 千明 外科的侵襲が牛の血液性状に及ぼす影響 近江 渡辺

チ80052 折戸小津江 外科的侵襲後にみられるリンパ球の電子顕微鏡的観察 近江 中村

チ80060 川岸 裕二 ブタジラミの生態に関する研究 近江 鈴木(伸)

チ80061 紀伊 清治 関東地域における鶏自然卵の生産状況 渡辺

チ80071 具志堅興律 子豚の貧血に対する予防法の検討 近江 鈴木(伸)

チ80082 桜井 雅樹 犬の衛生管理に関する研究 被毛の洗浄法 近江 渡辺

チ80094 下村 治 東京近郊における乗馬施設の衛生対策について 近江

チ80133 中村 浩幸 牛乳房炎の治療に関する研究 近江 渡辺

チ80135 永見 重明 子牛の下痢に対する治療法の検討 近江 渡辺

チ80136 西野 隆吉 家兎耳疥癬症の治療に関する研究 近江 渡辺

チ80137 沼田 満穂 豚のトキソプラズマ症並びに萎縮性鼻炎の野外抗体調査 近江 渡辺

チ80138 野田 和加 Canine Filariosis に関する研究 近江 杉村

チ80141 長谷ゆかり 哺乳動物の歯牙疾患に関する研究 歯垢の付着部位について 近江 渡辺

チ80142 服部 寛子 犬における乳房腫瘍の病理組織学的研究 近江 渡辺

チ80147 東 弘明 奄美地方の有毒低木草の種類に関する研究 右田

チ80149 蛭川 文 犬の衛生管理に関する研究 糞の処理について 近江 渡辺

チ80151 富金原 茂 山口県萩市における肉牛の衛生対策について 近江 渡辺

チ80155 古市 裕典 抗生物質の鶏体残留に関する研究 渡辺 近江

チ80152 藤田 幸江 孵卵経過中における孵卵器内の細菌分布状況について 渡辺 近江

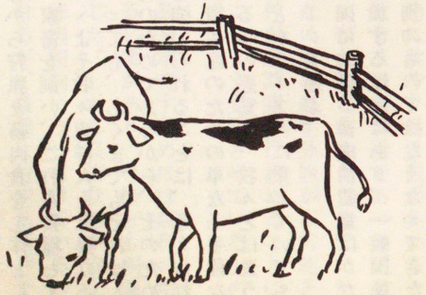
チ80181 矢花 雅之 薬物性肝障害犬に対する砒素剤投与後の臨床的変化について 近江 渡辺

チ80183 山口 晴夫 飼槽内残留飼料における付着細菌の検索 近江 渡辺

チ80185 山本 昇 牛の皮膚糸状菌症に関する研究 近江 渡辺

チ80191 若山 敦子 東丹沢に生棲するホンシュウジカの内部寄生虫に関する研究 近江 渡辺

チ82604 鎌田 佳子 殺虫剤処理ラットの病理組織学的観察 近江 渡辺



農場だより

日本人の食肉

富士分場長　小林茂樹

最近の若年層の人達は、蛋白質食品として魚肉よりも畜肉を好む傾向にある、といわれる。私もまだ決して老いてはいないが、それ程若くもない。私が育った頃は、世の中が全体として大いに物資不足だったから、畜肉にあまり馴染みがなかったのだが、これは、私だけではないだろう。その頃は、現在に比べれば、魚肉の方が畜肉よりも相対的に安かったのである。

日本では、明治維新まで原則として四足獣（牛、馬、犬、猿、鶏）を食べることは、禁止されていた。というのは、天武天皇が「殺生禁断」の詔勅を出し、それが江戸時代の末まで国是として守られてきたからである。明治時代になってから、栄養豊富なものとして畜肉食が奨励され、明治天皇自らも率先して畜肉を食されたのであるが、やはり一般国民への浸透には、多くの年月を要したようである。

そのせいかどうか知らないが、私などは今だに牛肉や豚肉を食べる時、やや抵抗を感ずる。仕事柄、これらの家畜を繁殖し、育てているからかも知れない。時には、長期間面倒をみた牛を屠場へ運んで、それが脳天を打たれて枝肉になるまで観察し、自分のデータにするのであるから、牛にとっては全く気の毒な話である。

この点、西洋人は昔から狩猟と畜肉食を主体として生きてきた民族だから、家畜を飼い、これを食糧とすることに関する感覚は、おゝよそ我々東洋人とは異なるであろう。家畜を飼うといっても、あくまでもそれは人間の食糧生産、つまり福利のためであるから、そのために人間自身が余計な犠牲を強いられることは、考えられない。家畜を飼うことは、食糧生産のための単なる手段なのである。また畜肉を食べる時の感覚も、我々とは違う。生きたまゝの形で、豚などがテーブルに乗っていても、大いに楽しみながらフォークを運ぶ。

近年になって、わが国における畜肉消費量はかなり増加し、今後もさらに増加する傾向にあり、一般国民の畜肉食に対する感覚も特別のものではなくなってきた感があるが、それでも私自身は、わずかながらも畜肉食に対する抵抗をぬぐいきれない。しかし、よくよく考えてみると、魚肉だって同じことである。平気で魚肉を食べ、また釣りを楽しんでいるのだが、あれはまさしく「生きている」魚を殺しているのである。不思議なことに、先祖代々昔から魚は食べ物ということになっているから、殺生であることに変りはないのに、我々は何も感じない。魚もやはり気の毒なことである。

養豚の海外視察をして

農場養豚部　鈴木伸一

昨58年〝いのしし〟年で豚の飼養管理を行っている私にとっては忘れられない年となった。それは養豚に関することで海外に三回も出かける機会に恵まれたことである。

まず二月に台湾で、これは神奈川県伊勢原市の養豚農家の人達十五人と、今年卒業の陳忠正君に案内をお願いして、大規模養豚を視察してきた。二回目は十月に中国大陸に出かけた。これは日本中国農業農民交流協会派遣によるもので六人のメンバーで構成され、各地の中国豚種を視察してきた。三回目は十一月にアメリカのカンサス州で、これは日本航空が豚の空輸をしている関係から、アメリカの飼育場から成田の動物検疫所まで視察した。

この三回の視察でそれぞれの国の養豚事情が若干わかったので簡単に説明します。

中国大陸には豚は三億四千万頭飼育されているが、その大部分は農家（個人所有）で一～二頭飼育され、それによって国全体の飼育頭数が維持されているのが現状である。それは飼料の供給が充分でないためであり、したがって農家では半分を配合飼料でまかない、あと半分は水草や甘藷づるにたよっている。また都市近郊での残飯養豚も精々十頭どまりで、かつ一〇ヵ所もないそうである。中国の養豚で興味のあるのはやはり繁殖性能である。もっとも早熟なものは生後七十五日令で排卵があり、しかも受胎試験も行われ、かつ分娩までさせていることであった。それから一般的にはやり産子数が多いことで平均十三頭もあり、乳頭数も八対が普通であった。各地の国営養豚場とも年二回（春と秋）分娩をさせていた。これは施設設備が充分でないため通年分娩が不可能との事であり、したがって種付が短期間に行われることになるのでほとんど人工授精によって受胎させているとのことであった。

中国の場合、飼育頭数を増やすためには飼料の増産や飼育環境等の改善をする必要があり、今後とも飼養頭数の増加は望めないと感じた。しかし経済状態が向上しつつあることから豚肉の赤肉指向になってきているので肉質の改善が急務と思われるが、農業に対する研究予算はほとんど増加しない国家方針であるようだ。

次に台湾の養豚事情であるが、日本とほぼ同様の飼養形態である。つまり飼料のほとんどを輸入にたよっているが、それでいて日本やアメリカ等に輸出している。そ

れは大資本家が大規模飼育により低コストで行っているためである。しかしまったく問題が無い訳けでなく、それは肉質が若干落ちることである。ヨーロッパ産に比較してやや軟脂の傾向があり、今後改善をはかる必要がある。もう一つは公害である。臭いもさることながら糞尿処理をどのようにするかである。輸出に熱心であり日本にとってはよきライバルである。

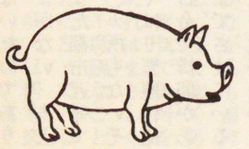
最後にアメリカであるが、今回はカンサス州にあるデカルブ社の基礎豚作出農場（七農場ある）の一ヵ所だけを視察したのであるが、育種会社であるから当然大規模経営で一農場で母豚一、二〇〇頭の一貫生産をし、なおかつ十二～三名で飼養管理し、そのうち女子が二〇％をしめていた。施設設備に資本を投下し、大資本で行ないかつ、飼料原料も地元で供給できるように工夫されていた。また防疫に対しては、豚舎の消毒と人の出入には細心の注意を払っていた。特に人の場合はシャワーで消毒し、衣服を全部交換して農場に入り、また退場する時もシャワーをあびて出るのである。飼養管理等についてはコンピューターでデータ処理を行っていた。また各農場間で経営コンペが行われ、優勝農場のマネージャーには豚皮でできたジャケットが贈られるそうである。

なお原々種豚を日本に輸出しているがストレス等の関係から十四週令前後で体重も50～60Kgのものが中心である。アメリカ国内ではトラック（大型トレーラー＝コンボイ）で輸送しているが、二、四〇〇Kmを三十時間で走るのにはおどろきであった。日本にはジャンボ・ジェット機によって空輸されている。成田の動物検疫所には二週間繋留し、異常がなければ国内で利用される。豚は世界各地（アメリカ・ヨーロッパ）から年間約三、〇〇〇頭輸入されている。

なおアメリカの養豚の場合は大資本をかけた経営が多く、今後とも肉質と同様に繁殖成績の向上が問題と思われる。

昨年は私のほかに技術職員の鈴木明浩さんがヨーロッパの養豚事情を視察し、「養豚情報」の58年8月～10月号に掲載しているので読んでいただければ幸いである。

〃一見は百聞にしかず〃今年も機会があれば、視察だけでなく腰を落着けた調査をしてみたいものである。



畜産における衛生管理

農場酪農部　佐藤光夫

近年の畜産は、多頭羽飼養の形態を成すにつれて飼養方法も細分化されており、その最たるものは養鶏である。完全配合飼料を作り上げ、飼料計算をして飼育することから生産物のコスト計算までと綿密な設計が成されている。これに対して養豚では養鶏を見習え、ということで飼料要求率の低下や早期肥育の技術あるいはSPF豚の出現などと急速に変化している様に思われる。この点酪農界は一歩遅れているかも知れない。しかしながら消費者側より薬漬け公害などと指摘されている点も見過せない。われわれ農大人は常に生産者側から考える習慣はあるが、消費者側からの質問に対しても答えられる姿勢を作っておくべきであろう。

薬漬け公害とは何か。多頭羽飼育による経営では、家畜が病気になってから治療薬を投入するだけでは経済性が成り立たず、病気にならない様に予防する必要がある。このために予防薬や保健薬を投入あるいは飼料に混入して給与しているのが現状である。したがって、これらの薬品が乳・肉・卵などの生産物中に検出されなかったとしても、薬漬けの状態で飼育していると云われる所以である。これらの状態を今後是正できるであろうか。なぜ薬品の使用量が増加するのか。表題にかかげた衛生管理を徹底することは薬品の使用量を低下させることになるであろうか。

そこで昭和56年から58年にかけて畜産の研究の今月の話題に紹介された論文を拾いながら畜産の衛生管理について述べてみることにした。（畜産学科の学生諸君は読んでいるかも知れないか。）

まず著者である（豚）氏は日本の酪農家や養豚家達を例を上げながら、いかに衛生管理がなっていないかを指摘している。「近年の種豚場では部外者を一斉に立入禁止にしたり、あるいは薬液槽を設けて白長グツを差し出して案内をしたりするが、場内の犬やネコなどのベクター（病毒運搬者）が出入りすることは自由である。」この点に関しては、酪農でも牛乳処理室の衛生などについて思い当る所がある。さらに（豚）氏は、「酪農施設の適否や不合理性を〃衛生〃〃労働〃や〃投資〃の面を、併わせて適正に指導できる人は日本にはいない」と指摘し、「（生産性の高い技術）と（衛生基準の高い技術）を持つ畜産経営だけが生き残れる。」と述べている。すなわち、衛生管理の徹底は、予防・治療の医薬品の使用量を低下させるのみならず、生産性の増加につながる点を養豚のMD方式とSPF方式を取り上げて解説している。

良く日本は外国の真似をすると云われるが、国際競争力をもつためには現段階では参考にすべきであろう。こ

の意味において、アメリカで法的に実施されているという酪農の衛生検査基準を紹介してみよう。

≪乳　牛≫

① 異常乳を出す牛を最後に搾っているか、別のミルカーで搾っているか。
② 異常乳は正確に廃棄されているか。

≪牛舎・ミルキングパーラー≫

① 壁・床・天井・飼槽などが水を透さない材質でできているか。
② 表面が滑らかに処理されて白ペンキを塗り、水洗できるようになっているか。
③ 天井からホコリは落ちないか。
④ 人工および天然の照明で牛舎内が24時間一定以上明るくできるか。
⑤ 牛舎内に飼料貯蔵施設があるか。
⑥ 口のあけた飼料袋やフタのできない飼料カートが放置されていないか。
⑦ 換気が充分か。
⑧ 敷料はきれいに始末されているか。
⑨ 鶏や豚や犬を牛舎内外に見かけないか。
⑩ パドックの排水状況は良いか。
⑪ 牛舎の内外に水溜りや堆肥（糞尿を含む排棄敷料）の山がないか。
⑫ 堆肥のある所に乳牛が近づけないようになっているか。

≪牛乳処理室≫

① 照明と換気は十分か。
② 壁・床・天井は明るく白ペンキが塗られて水洗ができ、汚れがすぐにわかるようになっているか。
③ 牛乳処理室と牛舎との間に直接の空気流通があるか。
④ 牛乳処理以外の目的で使用していないか。
⑤ 牛乳処理に使用する器物以外の物が置いてあるか。
⑥ 鶏・豚・犬・他人などが入れないようになっているか。

≪トイレと上水道≫

① 人間用のトイレと洗面所が設けてあるか。
② 人間の糞尿が正しく処理されているか。
③ 洗面所に清潔な専用タオルまたは紙タオルと消毒剤が設置されているか。
④ 扉は自動的に閉まるか。

≪牛乳器具・設備≫

① すべての器具設備は耐水性で水を吸わず安全で、洗浄しやすく表面処理され、修理が完全か。
② 洗浄と消毒が完全に行なわれているか。
③ 牛乳が触れる可能性のある物はすべて洗浄消毒後に汚染されないうちに収納されているか。

≪搾乳作業≫

① 搾乳時に牛の乳房・乳頭・腰部・腹部・尾に肉眼でわかる汚れがついていないか。
② 毛刈りがしてあるか。
③ 乳房と乳頭は搾乳前に消毒されたか。
④ 濡れた手で手搾りしなかったか。
⑤ 搾乳用の椅子・腹部・アンチキッカーが床面より高く清潔に保管されているか。
⑥ 搾乳時に使用する器具はすべて洗浄できる材質でつくられているか。

≪作業員・人間≫

① 手洗い設備が搾乳中にいつでも容易に使えるか。
② 搾乳器の洗浄設備とは別に人間用の手洗設備があるか。
③ 搾乳前に手を洗い消毒して乾燥させているか。
④ 搾乳中に手が汚れたり濡れたりしたら再び水洗・消毒・乾燥をくり返しているか。
⑤ 搾乳用の清潔な長い上衣を着用しているか。

≪牛乳冷却≫

① 搾乳後2時間以内に45°F（7.22°C）以下に牛乳が冷却できるか。

≪牛乳中の細菌数≫

① 原乳出荷時に1㎖中の総菌数が規定以下であるか。
（厳しい州で5万以下、ゆるい州で10万以下）

≪昆虫・ネズミ・野鳥などの環境衛生≫

① 昆虫やネズミおよび野鳥の繁殖しやすい場所が牛舎の周囲や付近にないか。
② 牛乳処理室は昆虫・ネズミ・野鳥などが入れない構造になっているか。

以上が検査項目である。これらの合計点が100点満点になっており、減点法でチェックして行き、一般には75点以下の場合はB級牧場に指定され、出荷乳は二等乳扱いになるという。さらに50点以下では生乳の出荷停止命令を受けて、酪農経営の継続が出来なくなるという。もし日本でこの検査項目を実施したならば、本学厚木農場は何点もらえるか。大部分の酪農家は出荷停止か二等乳扱いになるものと思われる。

日本の現状で考えるならば、少々オーバーな話と思われるかも知れないが、前述したような国際社会の中で畜産指導者はもとより、生産者自身が牛乳という食品を扱っているのだという認識から酪農を見つめ、衛生管理を行なって行く必要がある。また近い将来にはアメリカに類似した衛生検査基準が課せられるかも知れないのである。反面、このような処置が畜産における薬漬け公害から解放されることになるので、われわれは積極的に対応しなければならないと思われる。

優秀卒業論文紹介

57年度卒業生優秀卒業論文

学長賞
～北海道における酪農家の負債の現状
特に別海町における現状
―桜井 瀬戸 修

学科長賞
～牛乳房炎の予防に関する研究
―近江 渡辺(忠) 鈴木佐重喜

西川賞
～家禽の肝 RNAに関する比較免疫学的研究
―渡辺(毅) 宇佐美 望

伊藤賞
～哺乳動物の細胞融合に関する基礎的研究
―田中 鈴木 拓郎

三浦賞
～雄鶏における血中Testsuterone濃度に及ぼすPRL及びLH投与の影響
―一戸 藤野 茂樹

北海道における酪農家の負債の現状

瀬戸 修

加工原料乳地帯である北海道野付郡別海町及び西春別農業協同組合内での酪農経営を参考にして、酪農家の負債の実態を探ってみたい。

まず、北海道における酪農家の負債の現状を見る。不足払い法施行以降の規模拡大状況において、戸数は減少を続けているが、乳牛飼養頭数及び一戸当りの飼養頭数は伸びている。また、経営規模の変化としては、頭数規模の拡大が進行して、経営耕地規模別の乳牛飼養戸数は、上層へ集積する傾向にあるとみられる。さらに、機械の所有状況は、飼料作部門の拡大に伴い、大型の機械（トラクターなど）が必要になってきた。以上が不足払い法施行以降の酪農経営の規模拡大の進み具合である。では農家経済はどのようになったのであろうか。

経営収支で昭和45年度は出稼ぎ等の収入を除くと、赤字であるのに対し、50年度では黒字となっている。しかし、これも55年度になるとかなりの赤字となる。また、借入金、負債も増加の一途をたどっている。

これは、酪農近代化の為に農用機械、設備への多額の投資がなされたことになる。

次に、酪農経営の負債の実態を見る。道農務部による専業酪農家92戸の調査によると、単年度収支が黒字の農家は32％の29戸、その他の68％の63戸は赤字となり、その実状は深刻なものとなっている。この調査では、平均の負債が三、四一一万円となった。これは調査対象を他の地域に移しても大した差はない。

北海道における現状は以上のようであるが、別海町での酪農家負債の現状はどうだろうか。

経営規模を見ると、別海町でも酪農家の減少が見られ、乳牛飼養頭数、乳量共に増加している。さらに、耕地面積の増大、大型機械の使用増加などで別海町でも急速に規模拡大がなされ、北海道でも有数の酪農地帯となった。しかし、その為に多額の投資がなされ、道平均よりも高い負債が存在している。

最後に西春別農協内での現状を見よう。

ここでも酪農家の減少、飼養頭数、乳量の増加が見られ、かなりの規模拡大がなされている。当然多額の負債をかかえている。この最大の原因は、48年度のオイルショック、それ以降の連続乳価値上げ、52年度からの乳価据置、54年度以降の生産調整であると思われる。

北海道酪農は不足払い法施行以降に急速に発展し、一戸当り飼養頭数、生産量はヨーロッパ酪農を超えたと言われる。反面、多額の負債を生む事になった。

結局、酪農家の負債問題を解決し、酪農発展を進めるためには、経営環境の改善、根本的な農政の転換が絶対条件であり、それなくしては負債問題は悪化する一方であると思える。

各賞より今回は学長賞をお受けになられました瀬戸修先輩の「北海道における酪農家の負債の現状、特に別海町における現状」を石岡先生より御協力戴き御紹介さしていただきました。



別海だより

「農大健児の意気を見よ」

別海実習

畜産学科一年　古田多美

私がお世話になったのは、別海町西春別の前岡牧場でした。数の多い時は、三百七十頭以上もいるという、大きな、肉牛の酪農家でした。一年生の分際でのこのこと実習に行き、また自分の家は、不幸にも農家ではなく、何もかも新らしい世界の事でした。ですから、一ヶ月間でしたが、色々な事を学びました。

着いた次の日から働き始め、まず一番最初に経験した苦しみは、粉ミルクをとかすお湯を運ぶ事でした。ドラムカンに、なみなみとお湯を入れて通路を歩いた時の、手にくい込む感覚は、今でも忘れません。そしてその時今日から始まるのだと思ったのでした。雨の日も風の日も、一頭一頭、仔牛にミルクをやる事には変わりはありません。初乳を飲み終え、運ばれてきた仔牛にはとくに指でやり、それが多い時には、ハッチの数が七十以上、仔牛のミルクやりだけで、たいした時間でした。また、この仔牛が、下痢をして次々に死んでゆき、これは、年の損害にすると、何百万になり、頭の痛い問題なのでした。

次に味わった苦しみは、ビート畑の草刈りでした。ビートとビートの間の雑草、とくに、アメリカオニアザミを刈る仕事でした。終わったと思って、ビートの中から顔をふと上げると、まだまだ、半分も刈ってなかったりして、その広さに改めて驚かされたりしました。その晩は、腰が曲がってしまうかと思ったくらいです。

その次に私は悲しみに出会ってしまいました。朝からビート畑の草刈りをして一服している時でした。めずらしく家から電話がきて、友人の死んだ事を知らされたのでした。よりによって、私がこんなに遠い北の果てに来ている時に、彼は逝ってしまったというのです。その電話を受けた時、私は力がぬけてしまい、すぐに帰って誰でもよいから会いたい、と思いました。けれどもその後すぐ、おばさんの声とともに、また仕事がはじまったのです。泣く暇もなく、ぼうっと何も考えられずに仕事にとりかかり、果てなく続くようなビートを刈っていると涙が、ぼろぼろ止まらず、鎌を持つ手が見えなかったというより、本当に気がぬけてしまっていました。けれども、声をかけられて、ふと気付いた時、今帰ったら、自分は何なんだろうと考えたのです。ここでは、きっと、人が亡くなっても、朝のミルクやりも、草刈りも、変わらないのです。彼は、病気でしたが、いつも笑って先の事話していました。彼は、強かったのです。自分のやりたい事しに来ている私を理解してくれるはずです。私も黙って、一ヶ月間がむしゃらになろうと、向うでの自分を忘れて働いて帰って、思いきり泣けばいい、そう決心したのです。

そしてまた同じ日々が続き、今年最後の梱包上げを味わいました。何よりも疲れる仕事でした。しかし仕事の後の疲れが一番大きく、壮快なのもこの仕事でした。

牛舎の除糞もまた、腰の痛い仕事でした。なかなか糞というのは重いものだというのを実感させられました。また、下にひいてやる、おがくずが手にささり、いくつも水ぶくれを作りました。

牛の牛舎から牛舎の移動、出荷、この時、私は、牛に殺されかかりました。また、牛の去勢、注射などありとあらゆる仕事がありました。一つ一つどれをとっても、初めてであり、感動してばかりでした。しかし、仕事は仕事、大変なものでしたが、私に比べ男の人は、ロールを運んだり、麦乾や、おがくずを取りに行ったりで、はるかに、私の倍は働いていたのです。私が苦しいはずがないのです。また、家事の手伝いは私の唯一の仕事。

それから、働いた人誰もが言う、その夜のお酒のおいしい事、多くの先輩方の味わったビールの味とやら、私も味わってまいりました。近くの川で獲ってきた魚のおいしかった事、特にかの有名な、身のピンクの魚の卵は最高でした。牧草地にある川の谷間でとれる、ぼりぼりや、しめじ、しいたけのおいしかった事、そこでしか味わえないものでした。

そんな毎日の暮しの中で感じた事は、〝暮しの流れ〟でした。毎日、何の変わりもなく同じ事、同じ仕事の繰り返し。しかしそれが、一番大切な事だとつくづく思わされたのです。生きたものを飼い育てる事のきびしさです。

朝から晩まで仕事をして、食事は、腹にためるために食べる、私が自分の家で一家団らんするのとは大違いです。自分の家を建て直すなら、牛舎の屋根を直す。人の事にかまう前に、牛の事なのです。

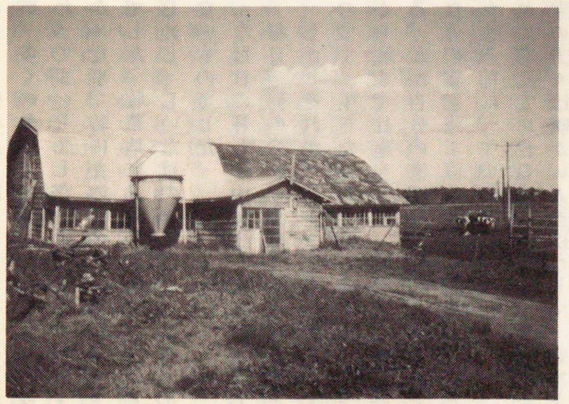
それからそこに住む人達の愛情、特に私のお世話になった家の方々は暖かい人達ばかりで、家族という結びつきが深く思われ、そこには、寒くて広くて他に何もないそんな環境だからこそ、そう感じたのでした。ゆっくりとした、おおらかな、こんな時の流れもあるものかと本当に素晴らしい所です。きびしさの中にいられるのは、そんな素晴らしさがあるからこそ。

素晴らしいと言えば、はずかしい話ですが私は、天の川を見た事がありませんでした。しかしついに見たのです。満天の星とともに、どうどうと流れる天の川を。天の川とはよく言ったものです。そしてあんなに空が低く星が多いとは。それから今まで見た内で一番きれいだと言える虹も見ました。それからもう一つ、生まれて初めて風を感じました。ミルクをやっている時です。木の揺れる音でも、サッシのすきま風の音でもありません。何もない草原をただ、単に吹き抜けてゆく風の音でした。一瞬、手を止めて耳を澄まして聞いてしまいました。それから、東京には無いぶ厚く重い雲、雲の陰、真っ暗な夜、霧の朝。

ただの憧れだけでは生きてゆけない所です。しかしただの憧れだけにさせておいてくれない所でもあるのです。

私のような未熟者が行くという事は、酪農家の方々にとっては、大変な迷惑だったと思います。しかし自分にとってこの経験はすばらしい学習であり、感動でした。すべて体と心で学び、感動してきました。迷惑かけた分は来年とりもどせます、あんなに充実した毎日は、今までになかった事です。そしてあんなに楽しい毎日は。

帰る日、ミルクのお湯を運びながらふと立ち止まると、ドラムカンを何の苦もなく持っている自分に気付いたのです。思わず笑ってしまいました。帰ってから落ち着かない、気のぬけた毎日、いかに向うの暮しが充実していたのか思い知らされ、しばらく皮の厚くなった手が、だんだんもとにもどるのが悲しかったのでした。



別海実習（出逢と別れ）

畜産学科一年　中山昭洋

「ガッタン、ゴットン、ガッタン、ゴットン」

次は別海町、次の停車駅は別海町です。というアナウンスに私は、うとうとして寝むりかけていた瞳をこすってはっと、我にかえった。窓の外を見ると、もうすっかり周辺は夕暮れて薄暗く、遙か彼方の草原から漂ってくる風は、半袖のシャツでは寒い程に感じられた。私はその空気を、おもいっきり吸い込みやっと着いたのだ。よくもこんな北の街まで来たものだという感慨で胸一杯になっていた。私がこの駅に降り立ったのは、この町の牧場で実習するためなのである。

私が実習することになった牧場は、沼崎牧場といい北海道野付郡別海町西春別にあり、経営面積は40ha、牛の頭数60頭、家族3人という北海道の牧場としては小規模経営の方であった。この沼崎牧場の親方は、まだ三十三才で若くバリバリの脂ののっている頃である。今、親父さんが入院しておられ、お母さんと二人暮らしである。このお母さん、いや私から見ればおばあちゃんは、年はもう70に近いのにすごく元気が良く、

「あたしの悩みは息子に、早く嫁さんがみつかることじゃ」

と梅干しのような顔を、増々くしゃくしゃにして笑う陽気な人なのである。また息子さんの方も威勢のいい事を言われる割には、お人良しのようで私が何か言うと、

「んだ、んだ」

という方言で、相槌を打たれる。それが妙に滑稽に見えたのであります。

時は、もう9月である。東京の9月はまだまだ暑く、30度を越える日も珍らしくないのに、北海道に来てびっくり異様に涼しいのである。朝夕はもう寒い程であるのです。そんな時期であるから、北海道の実習で一番忙しい乾草作りが、ピークを過ぎていて牧草地の大半は、茶色の大地を現わしていた。が、まだ10ha程牧草が残っておりそれを刈り取る作業を、行うはずであったがどうした事か、天気が毎日悪く雨か曇りの日が続いて、週間天気予報でも晴れる予報は全々なかった。それでこの仕事は伸び伸びになってしまっていた。

牧場での生活も一週間を過ぎると、さすがに生活のリズムに慣れてきた。朝5時に起床、搾乳をして育成牛にミルクを与え、牛を放牧する。昼は牧柵の修理や牛舎掃除である。北海道の酪農家というのも、本州の酪農家と決して変わるところは、さほどないと思うのである。む

しろ仕事がおおざっぱで、楽のような気がするのである。ここの沼崎さんのいつもの口癖は、

「建物に機械に、金はかけたらいかん、かけるなら牛にかけろ」

ということである。その通りに、牛舎も育成舎も、すでに30年は経っているというボロボロの小屋のような物である。酪農家の現実として、今や借金していない農家はないと言われる。そんな中で沼崎牧場には一銭もの借金はないという。こうやって、私のような実習生を雇うというのも、考えてみれば安い労働力を入れたことになるのである。そう思って改めて牧場を見渡してみると、なるほど、何気なく見ていたこの風景が異って見えてくるのである。確かに北海道といえば緑の大地が広がり、青空はどこまでも続いていて、そこに静かに牛の草を食む姿があると、誰もが思っている。が、それはテレビや雑誌で見るほんの一場面でしかないのである。私がこの目で見ている、この風景は人間が自然の中で生きてゆく、その厳しさだけを物語っているのである。都会で暮らしていると、時間に流されて忘れてしまいそうな事が、人間の本当のやさしさみたいなものが、蘇ってくるような気がするのであります。

そんな忙しい日々を送り、ここでの生活も20日を過ぎた頃、沼崎さんが急に今日は早く仕事を終えて、バーベキュー大会をやろうと言い出されたのです。その言葉どうりにその日は、夕方の搾乳を早く終え、ドラム缶に火を燃やし、バーベキューセットを持ち出したのです。近所の人も呼んで、そこに来ている実習生もいっしょに来て、あっという間に西に沈んだ夕陽を、なごり惜しむまに、バーベキュー大会は開かれたのです。久し振りの酒でした。私は、もう月が高く登る頃には多少酔っていました。非常に気持ちの良いほろ酔いかげんだったのです。沼崎さんも酔っておられるようで、得意のカラオケが出て、いつもの演歌が白く霧のけむった草原に、漂っていました。おばあちゃんは、入歯がなくなったと言って一人探し回っておられます。その内に、どこからか、

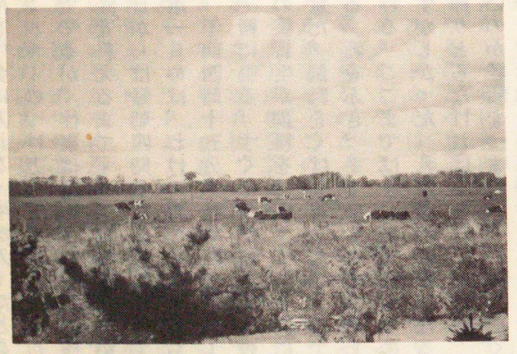
「農大の学生、大根踊りやってみてくれ」

というリクエストが相次、おもわず私は、そばに置いてあったビール瓶を2本両手に持って、満天に広がる星空に向かって大声を上げて踊ったのです。もう夜風は、冬の訪れさえ感じられる程の冷たさでしたが、その夜の私には、快よく感じられ静かに夜は深けていったのであります。

そして私が、沼崎牧場での実習期間が終る2日前、天気が回復したのです。テレビの週間天気予報でも、ここ当分は晴れの日が続くであろうとのことです。沼崎さんと私は、すぐにトラクターに飛び乗りました。刈り残している牧草10ヘクタールがまだあるのです。農業というのは、天気とのかけ引きであります。雲の具合を見ながら、ここぞという時期を決して逃がしてはならないのです。それは酪農とて同じことなのです。今度の牧草は乾草にはしないで、サイレージにするのです。沼崎さんがモアーで刈った後を、私はロールベラーで丸めて行きます。それが終ると4t車を私が運転して、沼崎さんがフロントアームで車に積み運ぶのです。運んだ牧草は、一列に地面に並べられ、その上からビニールをかけるだけで作業は終りです。ですから沼崎牧場には、サイロというものが有りません。この方法は最近普及したそうで、サイレージの出来も良くて、非常にコストも安くつくので評判が良いそうなのです。私が帰る日までに終ってしまい切れずに、期間を3日延ばすことになりそれでようやく一段落ついたのであります。最後の最後になって、ようやく北海道の牧場らしい仕事ができたのです。

そして、ついに帰る日がやって来ました。考えてみるとあっという間の一ヶ月間でした。たった一ヶ月間とはいえ、いっしょに生活した沼崎さんとおばあちゃん。別れとなると、やはりさびしいものであります。その朝、私は駅まで送ってもらいました。そして、おばあちゃんは東京までは長旅になるだろうからと、手土産を持たせてくれました。汽車が駅に着き、私がそれに乗り込み汽車が発車して見えなくなるまで、お二人は見送ってくださったのです。私はうれしくて、うれしくて、胸が一ばいになる思いでした。

それから私は、青函連絡船の上で、おばあちゃんからもらった包みを開いてみました。そこには、大きなおにぎりが、ふたつ丁寧に包んでありました。私は、一口、一口、噛みしめながら食べるたびに、この一月の事が想い出され、その満足感で体が満たされてゆくのを感じていました。ふと、覗いた窓の外には、函館の街の灯が小さくなってゆきます。それを見ながら私は、ありがとう沼崎さん、ありがとうおばあちゃん、そしてありがとう北海道、と一人、小さく呟いていたのであります。



別海実習

畜産学科一年　中島　昭

厚木農場から帰った次の日の八月二十六日の夜に、ぼくは北海道に出かけた。フェリーで釧路に向かった。フェリーの中で星を見ながら「一ケ月も実習なんて長いよなあ」と少々不安な気持ちになる。釧路で列車に乗るが、途中の乗りかえ駅厚床では二時間も列車を待つことになってしまった。駅前には何軒かの家と青い空があるのみだった。同じように列車待ちをしている人が四人いて、話をしてみるとそのうちの三人までが農大生で、しかもその中の二人は別海に酪農実習に行くのだそうだ。面白いこともあるもんだと感心していると後でクラクションの音。ふり向くと気のよさそうなおじさんが車から首を出し、同じ方向へ行くなら乗れと言う。ぼくたちは素直に好意を受け、別海町役場まで送ってもらった。

ぼくの実習先は大沢牧場である。車で役場まで迎えにきてもらう。ここでも意外な出会いがあって、もう一人の実習生は、ぼくと同じ船橋市に住んでいる人だった。着いた日の夕方に早くも仕事が始まった。飼料をくばり牛を牛舎に入れる。牛が入ったところで、乳のふき方やミルカーのつけ方などを教わる。初めての事なので夢中でやるが、仕事は遅い。この日は搾乳を終え、牛舎の掃除を終えるまでずいぶん時間がかかってしまった。次の日からは毎朝四時十五分起床なので早く眠る。こうして第一日めは、わけのわからないうちに終る。

午前四時十五分。腕時計のアラームと目覚まし時計が一緒に鳴る。すぐに飛び起きて牛舎に向かう。もう一人の実習生が飼料をくばっている間にぼくはミルカーの用意だ。飼料をくばり終ったところで戸をあけ、牛を入れる。乳をふき、手で少し牛乳を出してからミルカーをつける。ここまではすぐ覚えられるのだが、後しぼりがむずかしかった。乳房炎の原因になるので、牛乳は完全に搾りとらなければならないのだが、残っているのかいないのか経験をつまないとわかりにくい。ぼくの判断では残っていないようでも、牧場の親方がみると、牛乳が残ってしまっているような事がよくあった。搾乳が終ったところで牛を外に出す。大声や奇声を出したり、ほうきを持って牛をひっぱたいたりして、すばやく外に出すのだ。この作業はとても楽しいものだった。床を水洗いしてからやっと朝食だ。仕事の後の食事なのでとてもおいしい。一休みした後にまた仕事だ。雑草ぬき、牧柵なおし、牛舎掃除などの仕事をやるのだが、この家のおじいさんの庭いじりの手伝いをする事も多かった。夕方の四時になると、朝と同じように搾乳の用意が始まる。夕方は、もう一人の実習生がモトコンポに乗って牛を呼びに行ってしまうので、ミルカーの用意も飼料くばりもぼくの仕事になる。ベストテン北海道というラジオを聴きながら、いそがしく動きまわっていたので、ぼくは今でも「メリーアン」や「思い出がいっぱい」を聞くと乳しぼりを思いだしてしまう。乳をしぼり、牛を出し、牛舎を掃除する。手を洗い、タオルで手をふき、ラジオのスイッチを消す。牛舎が静かになる。そして牛舎の電灯のスイッチを消した瞬間、この時が一日の中で一番気分がいい安らぎのひとときである。後は待ちに待った夕食を食べ、風呂に入り、眠るだけなのだ。酪農実習は確かにつらいものだが、仕事の終わった後の気分は何とも言えずとてもいいものだ。

実習に入って一週間ぐらいたった頃、牧場主夫婦とその子供二人とおじいさんが旅行に行ってしまった。後は残ったのはぼくたち実習生二人とおばあさんだけになった。実習生だけを残して旅行に行ってしまうなんて大胆な事をするなあと思った。朝夕の乳しぼりと雑草ぬきと古い牛舎の除糞だけを言いつけられたので、しばらくの間は楽にすごせる。昼間は牧草地の上で昼寝をしたり、リスやミンクをつかまえたりしてすごしていた。

この大沢牧場は牛舎も住宅もサイロもすべて業者に頼まず自分たちで作ったそうだ。その上牧場主の親方は、「大学の卒業証書以外はすべて持っている」と自分で言うように機械の整備やこわれた所の溶接なども自分でやってしまう。つまり何でも自分たちでやってしまうので、借金のまったくない黒字経営なのだそうだ。

旅行に出てから十二日くらいたって、やっと牧場主が帰ってきた。本当はもっと早く帰ってくるはずだったのだが、一年に一回の長期休暇なので、いつも遅れて帰って来るのだそうだ。

次の日からは、二番草の刈りとりの用意が始まった。トラクターやトラックの整備をする。となりの家と合同で草を刈るのだ。機械の整備が終ると、今年最後の草刈りが始まる。この草刈りが終る頃、ぼくの実習も終わる。

一ケ月間の実習の中で、最後の十日間が一番仕事が多かった。朝食後、一休みもせずにすぐに仕事だ。トラクターでトラックを引っぱってエンジンをかけて牧草地に行く。トラクターのすぐ横について、吹き上げられた草を積んでゆく。トラクターとの間隔、速度、指示など、いろいろな事に注意しなければならない。何時間も休みなく続くので作業が終る頃になるとトラックのラジエーターからは白い煙が吹き出てくる。

九月二十七日、やっと二番草の刈り取りが終わった。

かまぼこのように積み上がった草の上にビニールをかぶせ、ビニールの端に土を盛り上げてすべて作業は完了。実習も終わりに近づき、冷たい秋風が吹くようになると、なぜか感傷的な気分になってくる。ぼくたち実習生の最後の仕事、牧柵の打ち直しが終った。立派になった牧柵を見ながら、大きな充実感を感じた。

ぼくの帰る前の日に、親方が、「北海道のうまい寿司を食ってみろ」と寿司をごちそうしてくれた。最後だからとビールも飲ませてくれた。

十月二日の朝、最後の搾乳が終った。おじいさん、おばあさんにあいさつして大沢牧場を離れる。牧場主である若夫婦の愛車ソアラで、網走まで送ってくれるのだ。ぼくが北海道に来てからは、晴れの日は数えるほどしかなかったのに、帰る日になると、霧の摩周湖さえ晴れてしまうすばらしい晴天になった。

初めての農業経験だったので長い一ヶ月だったが、とても充実していた。もう一度行ってみたいと思う。物を壊してしまったり、仕事が遅かったり、いろいろな迷惑をかけてしまったのに、その一つ一つの失敗を笑って許してくれた牧場主の大沢さんに感謝したい。



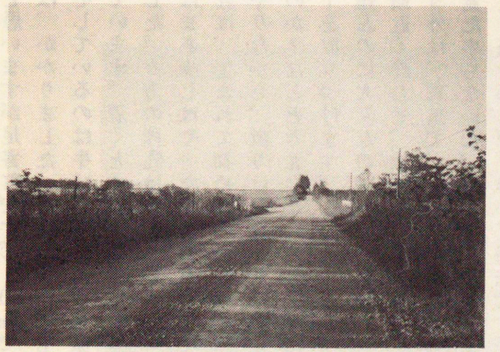
別海町実習を終えて

畜産学科三年　柿沼由美子

昨年の六月、畜産学科の掲示板に「別海町の農業実習案内」が張り出されていました。北海道は、それまで私の理想郷でしたし、いつも何とか安く行けないものかと考えていましたので、アルバイトとしての実習に、すぐ行く決心をしました。しばらくして受け入れ農家の名前と農場の規模などが書かれた通知が、役場から届けられました。八月二十四日、私はもうただ北海道へ行って働けるというのがうれしくて羽田から釧路行きのＴＤＡに乗り込みました。それまで北海道へは、夏と冬の二回、観光で行った事はありましたが、今回のような目的で行くのは初めてでしたし、何よりもそこで生活できるというのが、うれしくて、しかたありませんでした。お昼頃、釧路に着くと、あいにく雨でしたが、バスで釧路駅に向い、そこから、さらに列車に乗りました。途中、厚床で乗り変え、別海町に着いたのは夕方でした。役場の人の出向えで、役場に行き、説明を受け、さらに車で、農家へ――。ここまで書くのは簡単ですが、別海町は、日本で二番目に大きな町なのです。(ちなみに一番は御存じだと思いますが足寄町です。) 80Kmでとばして、車で20分は、かかりました。途中、行けども行けども草地ばかり。そしているのは牛ばかり。もう感激は、飽和状態を越えています。着くとすぐ作業着に着変えて、牛舎に向いました。夕方の搾乳はすでに始まっていました。他の作業はまあ少しはやった事もありますし、楽勝でしたが、搾乳は、生まれて初めての経験です。乳房をお湯でふいてやりながら、蹴りはしないか?とか、くすぐったくないのか?などと考えながら、軽くワセリンを塗り、ミルカーを取りつけます。このミルカーが、けっこう重くて、運ぶのに大変なのです。それを、一頭一頭、全部で五十頭近く終らせ、放牧し、牛舎を掃除し終った頃には、もう外は、真暗で、いつの間にか雨も上り、空には、まだ見た事もない程、星がでていました。冷たい風がここちよく当りのんびり歩いて帰宅です。ここまでは、予定通りでした。しかし――。

予定はあくまで予定です。いつまでも夢見ごこちではいられませんでした。私の理想は、この後、音を立てて崩れてゆくのです。作業そのものは、それ程大した事ではなかったのですが……。前日、受け取った通知には、家族構成九人とありました。その時、それが何を意味するか私にはわかりませんでした。その九人家族の内訳は、

おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、そして中3を頭に、下は小1まで、ずらり子供五人、他に実習生一人、私も含めて十一人です。四人家族の姉妹二人で育った私には想像もできませんでした。にぎやかと言うよりは、もう騒がしいのです。最後にはウンザリする程。食事時などはもう戦争です。それに、関係のない庭の草むしりや、薪割り？（まあ、これは楽しんでやった方ですけど…）までやらされて、そのうち、不満が積ってイライラしてきます。でもそんな時は、唯一解決法は残されているもので、朝、牛を集めに行った時、ボケッとしている牛に、うさばらしの一撃を決め込むのです。「ベーベー」と牛を呼びながら、すきを見て飛び膝蹴り。これはもう本当に快感です。酪農家は牛を大切にすると聞きますが、私には、あまりそう思えませんでした。サイレージなども、木造サイロをバキバキこわしながら、トラクターの運転に自信をつけました？でも、はっきり言ってかなり大変な仕事です。相手が自然であり、生きものですから。私がいる間にも、親牛が放牧中に死にました。草地の中で冷たく横たわったその巨体は、まるで何かを訴えているようでしたし、仔牛の誕生では、鎖で足を引っぱって、出産を手伝って無事生まれるとホッとして！　糞にまみれて牛舎掃除したり！　それでもそこには私の好きな生活のにおいがありましたし、そこで私はブツブツ言いながらも一ヶ月間、くらしてきました。松山千春の〝大空と大地の中で〟という歌の中に次のようなフレーブがあります。「果てしない大空と広い大地のその中でいつの日か幸せを自分の腕でつかむよう、凍えた両手に息を吹きかけしばれた体を暖めて、生きる事がつらいとか苦しいだとか言う前に力の限り生きてやれ！」まさしくそんな感じでした。自然の中では、理屈なんかじゃ生きてゆけないのです。これからは「農学栄えて、農滅ぶ」と言われないように……。



そしてまたいつか私も再び北海道でくらせたらと思います。最後に、お世話になった農家の方、ひどい実習生で申し訳ありませんでした。

集う学友
～われら仲間～

無題

畜産学科一年
匿名希望

偶成

少年易老學難成
一寸光陰不可輕
未覺池塘春草夢
階前梧葉已秋聲

少年老い易く学成り難し
一寸の光陰軽んずべからず
未だ覚めず池塘春草の夢
階前の梧葉已に秋声

若者は年を取りやすく、それにひきかえて学問はなかなか成就するものではない。だからほんのわずかな時間でも、いいかげんにしてはいけない。池の堤にもえる春の草が夢を見ているうちに、庭さきに茂っている青桐の葉に、もう秋風がいつのまにかしのび寄るのだ。

勧学

驚馬雖遅積歳多
高山大澤盡堪過
請看一掬泉巌水
流作汪洋萬里波

驚馬遅しと雖も積歳多ければ
高山大沢尽く過ぐるに堪えたり
請う看よ一掬泉巌の水
流れて汪洋万里の波と作る

いかに足のおそい馬でも、倦まずたゆまず、長年かかって歩み続けるならば、どのような高い山でも大きな沼沢地でも、すべて通過することができる。ほんの一すくいほどの岩間の泉も、絶え間なく湧き出て流れてやむことがなければ、ついには広々と果てしない大海万里の波ともなるのである。そのように人も不断の努力を積むことが大切であって、多少の才能などは問題ではないのである。

無題

畜産学科一年
農大を愛したスパイ

東京の外れに住む私は、マイホーム主義の親を持つごく普通の家庭で育ち、農業に関することは何もない人間である。そんな私が畜産に関することを述べられるわけもなく、又何を書いてもいいと言うので農大の東京における概評でも述べてみようと思う。

「東京農業大学って知ってる？」。ある人曰く、「うん…聞いたことはあるな」「じゃあ場所は？」。ある人曰く、「う～ん知らないなあ。どこか埼玉かそれとも千葉の方にあるの？」この言葉のやり取りは特別なことでも何でもなく、実際何人もの人に聞いてみても似たような返事しか帰ってこないことが多い。ただし世田谷住民だけは別であるが。

この前、某テレビや某雑誌で高校生・大学生や受験生などに選んでもらった「大学何でもベストテン」なるものを見た。行きたい大学、行きたくない大学、すべり止めの大学、彼氏・彼女を作りたい大学などそれぞれの項目ごとのベストテンを決めるものであり、多少農大に愛着？のある私は、興味を持ってそれを見た。しかし農大の名前はどこにもなかった。10位以下にもなかった。これは何を意味しているのだろうか。又知人に「どこの大学行ってるの」と聞かれると私はわざといつも「東農大」と答える。そうすると面白いことに知人は「へえ～東京農工大学か。国立じゃん」とほめたたえてくれる。そして私はきまってこう言う。「工じゃなくて業だよ」知人は少し考えて「そんな大学あったけ」私は不満そうに「東京農業大学だよ。お前こんな有名な大学も知らないのか」とののしって相手をいたぶるが内心は「やはり…」である。

農大はこのように知名度は低いかもしれない。いくら強がってみてもそれは単なる負け惜しみであるかもしれない。しかしそんな農大でも毎年二度ほど民衆の目に止まることがある。一つは初夏に行なわれるボロ市の時である。この時はテレビ局が撮影に来てくれて夕方のニュースの時間帯に流してくれる。そしてもう一つは箱根駅伝の時である。別にランナーが注目を浴びるのではない。応援団が踊る「青山ほとり」が注目を浴びるのである。「青山ほとり」と言ってもちまたではピンとこない。が、「だいこん踊り」と言えば判るであろう。農大をあまりよく知らない人でも、だいこん踊りのある大学と教えれば大抵の人は、「ああ、箱根駅伝の時、踊っている大学だね」と言ってくれる。（実際箱根駅伝でなくても踊ってはいるが、それは箱根駅伝が日本の正月に行なわれる伝統のある行事だからそれだけ印象度が強いからであろう。）又私が農大生であったおかげで一つだけ得したことがある。私が母の故郷である宮城県登米郡に遊びに行った時、私は単身に乗っていて信号無視をしてマッポに捕まってしまったことがあった。最初は切符を切られそうな雰囲気だったが、大学名を言ったとたん急にマッポは態度が変わり許してくれた。そればかりか農大をべた誉めしてくれた。そこが農村地帯であったからだと言えるかもしれないが、とにかく得をしたのである。（しかし家の近所で違反してマッポに捕まった時は駄目だったが）

こんなことからも農大生である限り年に一回ぐらいは農大生でいてよかったな、と思える日があるかもしれない。がしかし……　何かを書け！と言われたのでこんなことを書いてしまったが、これを読んだ諸君の中には運よく？農大生になったばかりの新入生もいることだろう。がこれを読んであまり悲観にならないでほしい。こんなくだらないことをダラダラと書いているとは、よっぽどの暇人でアホなやつだと思っていただきたい。（実際そうであるが）何故ならすでに君達は意地のある農大健児だからである。（少しわざとらしかったか？）。

迷える仔羊たちよ
走りなさい

畜産学科二年
考える人

いつの間にか、入学して二年間という歳月が過ぎ大学生活の半分が終った。その過ぎ去った日々の中で、いろいろな人達と出会い、そして別れた。お決まりの事ながら「あ!!」と言う間に過ぎたということが、実感である。

入学した当初、何の為にこの農大に入学したかを、はっきりと意思表示できた人達は少なかったであろう。それよりもこの大学に受かったから入学したという人の方が多かったのではないかな!?。しかし、動機はどうであれお金を出して四年だけ学ぶ場所として、農大に入ってきたのだから、農大でしか学べない物を学び、「私は、四年間ここで、こんな勉強をしてきたんだ」といえるようになりたいと思いませんか。今までの二年間で、自分が何の為に入学したかまだはっきりとしない人は、残された二年間の内に見つけださなければと私は思います。時間は、まだあります。

二年の終わりに、研究室の選考分けが行われ何を研究しているかもわからないままに、ホウリ込まれてしまっ

「母」

畜産学科三年
石川裕子

私事で申しわけございませんが、自分の母の事など、少し書かせていただきます。

一口に言うと、私の母は、けじめにうるさい、私にとって非常にこわーい人であります。

いつも休みの際、帰省する時など青くなります。

「まずい…。太ってしまった。スカートがはけない…。」それで仕方なく、ジーパンなぞはいて、ふだん自分がその辺をウロウロする様なかっこうをして帰ったりしますともー大変です。まず、ギッとにらまれます。そして、「21にもなる娘が、そんな男まがいのかっこうして…。」で始まる小言をえんえんと聞かされ、最後に、〝今後、絶対にそのような服装のまま帰ってきて、御近所に恥をまきちらすでない〟と、とどめを刺されるのであります。

もっとも、かようにロうるさき母も、好きで小言を言ってるわけではなくて、問題は、幼い頃から、人形なぞ見向きもせず、モデルガンだの木刀だの振り回して育ちどこかネジ一本はずれたまま現在に至っている私の方に

たという人が多いんじゃないでしょうか。

「○○チャンは、どこにしたの？」

「○○研！　××チャンは？。」

「△△研。」

「エー、ホントに私も△△研にしょうかなぁ。」

という感じで研究室を決めたのではないかな。そう言う私も、各研究室の説明会で弁当だけをパクついていた一人である。まあ理由はどうであれ所属した研究室で、どれくらいのことをすることが、できるかということが重要なことである。各研究室のつらさというものは、さほど差がない事であろうし、つらいことがあってもイヤがらずに実行すれば、これからの二年間研究室ではうまくゆくのではないだろうか。とにかくガンバリましょう!!

良き先輩にめぐり会うことを期待し残された、わずかな二年間を過ごしましょう。



あるといえるのです。それだけに、ろくな反撃もできずじっと小言を聞いているのは、中々辛い事であります。

母が階下にいる、自宅の自分の部屋で過ごす休暇中は、どうもビクビクして落ち着けません。特に、休暇あけに試験がひかえてたりすると、外出するにも多大な勇気を要し、漫画を読んでると、いつ入ってくるかとおっかなく、音楽をかけるにも気を使い、うかうかと居眠りもできぬといった有り様です。

しかし私も常に負けてるわけにはいきません。敵は烈火の如く怒り、少々感情的な言動をする事があるので、すかさず、そこから反撃にでるのです。

こうして周期的にケンカをするわけなのですが、さすがに、亀の甲より年の功、私の勝率は甚だ悪く、いつだったか大喧嘩をした時も、迫力に追わされて泣いてしまい。そのままブーブー言いながら、下宿に帰って来てしまいました。

ところが、です。今年の正月の事でした。冬休みも終りに近づいたので、下宿に帰ろうとすると、玄関に見送りに出てきた母が、「気をつけて、しっかりね。」と言いながら涙ぐむではありませんか。もちろん、気の強い、子供に弱みなど見せない母ですから、ボロボロなくわけじゃありませんが、私も何だか申しわけないような気持ちになって、「ヤダな。お母さんなかないでよ。」なんて言いながら、いつになく変てこりんな気分で帰ってきました。

下宿に帰って一人になると、何やら感動がおこってきて、ありがたい気持ちになりました。

「お母さんは、いつも私を心配してくれてるのだな。」と、小言を言われた事も忘れて、私は思いました。

収穫祭を終えて

畜産学科三年
宮成修

「今を一生懸命生きているか！」諸君は今、自分で納得のいくような充実した事をしているだろうか？　他人の目はどうであれとにかく自分自身で、生きて、考えて、働いて、つかれて、優しくて、悲しくて、つらいという実感をもつ事をしているであろうか。

私のこの第91回収穫祭を終えてこう思った。

そう私にとってこの収穫祭は今を一生懸命に生きていた時なのだ。考え、働き、つかれ、優しく、楽しく、つらかった時であったのだ、とすこしカッコよくはじまっ

たが、私も諸君ら同様（そうでないと思う人がいたら御勘弁を）半無気力であった、この収穫祭への参加も収穫祭とはどんなものであろうというやじ馬根性はあったが、自分自身の強い意志で行ったものではない。畜友会の一友人や研究室の諸先輩がたの多大のすすめによって「家畜苑」に参加したのである。学科としての収穫祭の仕事は、宣伝パレードで使うみこしの製作から始まり、次から次へと行事が沢山あるのである。興味本意のやじ馬根性はこれで終り、もう考えることもなくめんどうくさそうでいやになったのだ、そんな時又あの一友人に助言を受けたのだ。「都内宣伝パレードに参加できるのはうち（畜産）と拓殖だけなんだぞ」そうつまり、うちと拓殖は農大に数ある学科の中でも信頼され、優遇されているのである。そんな言葉や考えにのってか、みこし作りの手伝いパレードへの参加へと行動を移したのである。パレードの途中又友人に「どうだ、おもしろいだろう」と質問され、私は無言、楽しいことは楽しいのだが、つかれることもその数倍、その後友人はこう続けた「おれは、これほどおもしろいものはないと思ったんだけどな」パレードも多少の事件はあれとどこおりなく行なわれ、いよいよ私の本当の仕事、「家畜苑」が始まるのである。家畜苑とは私がいまさら説明するまでもなく畜産学科の人間いや農大の人間ならだれでも知っているだろう。でも仕事の内容は実際に参加したものでなければ詳しくはわからないだろうが、家畜を入れるおりの作製、門の作製、動物の移動、管理と連日連夜、寝る暇もなくいそがしく、農場や各研究室から動物をおかりしたとあって精神的にも休む暇がないのである。本当に精神精意、つかれたのだ。でも収穫祭の最終日あのファイヤーストームを見た瞬間いやあの火の回りを走る学科の勇士を見た瞬間私のあのつかれはすべて飛んだのである。我学科一番、我れ一番とばかり火の回りを走り回るのである。何周も何十周も、あの青山ほとりといっしょに。

私は最後に一言いいたい。私は畜友会の役員でなければ、その友人にたのまれたわけでもないしかし、「収穫祭、これほどおもしろいものはない」そして、せっかく自分の希望でこの学校この学科に入ったのだから、その中でおもいきり自分を表現してみよう。そして今を一生懸命生きてみようではないか。

農大に幸あれ、畜産に幸あれ、そしてこの考えに同意してくれた者に幸あれ。

S58・12・14



想い出……ボロボロ

畜産学科三年
都築延吉

「収穫祭」

この言葉を聞くと今は懐しく思える。そして、今でもその言葉に引きずられて生きているような気がする。それだけ、自分にとっては強烈な印象であり、また自分の人生を多少なりとも変えた出来事であった。

今まで二年間、畜産学科とは全く無縁の所で収穫祭を体験してきた自分にとっては、何もわからぬまま収穫祭へ突入していったのである。そして、収穫祭ではあまり目立たない仕事である北門という仕事にたずさわった。四号館に陣取って、毎夜一番鶏の鳴く頃まで約一ヶ月間休むこともせずに頑張った。今から思うと信じられないような行動をとっていた。平均睡眠時間などここで言うには及ばないが、それはそれはボロボロの生活であった。

「ボロボロの生活」

苦しかったが、これほど面白くて、これほど充実した時は、我が人生においてなかったことだと思う。

卒業前にもう一度ボロボロの生活をしてみたいと思う。勉強、卒論、就職などにしばられて忙しいとは思うが、合い間をぬってもう一度してみたい。そうすることによって、自分の力が少しでも高まるような、そんな気がするから。

北門が出来あがって、周囲のいろいろな声を聞いたが、あまり気にしていない。北門に対しては、収穫祭の裏の顔でもあるし、畜産学科としてのメンツ、伝統もあるだろう。もちろんその周囲の期待にこたえるように精一杯のことはやったし、自分にとっても充実した時であった。

ファイヤーストームの時に北門が燃えるのを見ながら、ボロボロの生活がぼろぼろになってゆくのを見ながら、やっと終ったと思った。良かったと思った。

無題

畜産学科四年
加藤章

鳴呼、畜産時代。25分の1世紀。
晴れてこの農大に入学して、もう四回目の師走を迎え

てしまった。初めは、大学に入ったからには、一つの道をそれなりに修めて、友達からも、父母からも、よくやったなぁと言われてみたいと思っていた。自分自身も、田舎ではできない何かを、何かに挑戦して、今までの自分から脱皮できないかとあれこれ探して見た。流石に大都会だと思わせる物や場所に出くわしたのだけれど、よく見れば外面づらだけだとわかった今日この頃です。

しかし、農大だけはこの都会の中にあって独特の文化を持った一つの城だと思われる。この城は、いくつもの違った流れをうまく一つにまとめ、またその時代に合った風体にと変身させていく巨大な生産工場をも兼ねている。俺がそんな農大の本当の姿を見たのは、やはり三年になって研究室の一員となってからだ。それまでの二年間、特定な場所《教室、生協、寮食、他》以外の、農大の本来あるべき所には、気づかなかった。畜産の一生徒としての価値はそれ以前にはただの頭数としてだけだったのだろう。研究室の一員となって初めて、農大の有効な使い方、価値も、農業の中の畜産の在り方も、少しずつだがわかりかけて来たし、仲間と農業のことで、議論を戦わす自分を発見して思わず驚いてしまう事もあった。へべれけになるまで酒を飲まされた事も、山のようにつまれた牛肉を食いきれなく残念に思った事もあった。そして、四年間の成果としての卒業論文の為に一ヶ月以上も毎日、朝から晩まで研究室にとじこもった事も、普段使ったこともない図書館での文献調べも、10年もしたら俺の大事な思い出になることだろう。

最後に、新入生諸君、これから四年間もあるなんて思わず、何かを思いついたら直ぐに、新四年生諸君、あと一年とは思わず、まだ一年も自由な時間と行動の可能性を持って、自分を見つけて下さい。全ての未来と可能性は、君の思い着きの第一歩から始まっているのだから。



サークルレポート

～われら農大生～

「責　任」

野生動物研究会の一会員として
野生動物研究会

「それは無責任すぎるよ」と言われた時、これほど自尊心を傷つけられることばはそうないでしょう。特に異性や後輩から言われるとなおさらです。今回はその責任について少しペンを走らせてみようと思います。

一九八三年をふり返ってみると責任という言葉は私たちの脳裏をいつもかけめぐっていったようです。国際的に例をとってみれば、航空機撃墜事件や米軍のグレナダ侵攻では機長や大統領の責任が問われる大問題でありました。また、一見責任という言葉など何の関係もなさそうな娯楽番組を例にとってみましょう。ビートたけしといえば今や悪口をいって人を笑わせる大スターです。人が傷つくことを笑いものの種とし、敬語を使いわけず、真剣にやっていることをひやかし、まじめ＝暗い＝イケナイコトのイメージをたたきつけたことなどが子供たちや社会に与える影響を考えると彼らのその罪は大きいと思います。この責任をとってくれと云われたら彼らはいったいどうするつもりなのでしょうか。

さて、ふじみの編集委員の方から野生動物研究会へ原稿を依頼されたのだからそれなりに書いてゆかねばなりますまい。

私たちは動物みたさにあちこちへ調査へ行きます。北は北海道から南はオーストラリアまで、その行動範囲はヒマと金の続くかぎり果てを知らないと思われるほどです。（ヒマがあって金がなく、失敗の許される学生の特権を生かしつつ…）中には自分のアパートを出て家具や生活用品を売ってまでもヘビを見に徳ノ島へ行くという人もいます。

そこまでして動物が見たいというのはなぜか?。元会長であった石井さんは答えます。

「我々は動物について少しでも知ろうというサークルであり、動物にたずさわっている以上動物というのはこんなに美しくおもしろいものだこんな生活をしているんだこんな立場にたたされているんだということを皆にアピールする責任がある。結婚して子供を育てる近い将来、命あるものの躍動感、命の尊さを教えることのできる豊富な自然を身近に残しておくというのも我々の重大な責任ではないか」……と。

私たちは美しい自然と動物を求めて調査に出かけた時無責任な人間の仕業にがっかりすることがしばしばあります。プラスチックの弁当箱や空かんやビニール袋が散乱し、海岸や川岸に出ればおびただしい量のつり糸や乾電池が投棄してあります。道路に出ればガムやタバコのかすがご石のように散らかっています。（まるでそれがあたりまえかのように）個々の人々の無責任な投棄により野生の動物たちは分解できぬ石油製品に胃をつまらせ、もがけばくいこむつり糸に悩み、種々の化学薬品に汚染されているのです。自分で出したゴミを自分で始末できぬ人間は最底だと思います。

自分の縄ばりを死守する勇敢なカワセミ、我子を温かく教育するヒグマ、目をらんらんと輝かせ見はりをするニホンザルなど彼らの責任感の強さには圧倒され頭が上がりません。私たちが彼らから学ぶことはまだまだたくさんあるに違いありません。

ニッポニアニッポンと学名のついたトキは今や絶滅しようとしています。その責任は農薬の恐ろしさを知らなかったニッポン人にあり、もっと身近な動物たちにも、いえ我子にもそのようなこと（種の絶滅）が、おこらないようにすることは、大人になるにつれ責任責任という言葉が耳ざわりになってくる中で、生命というものを考える現人類の最高の責任ではないでしょうか。

実習日記

農友会　農村調査部

はじめに——

今年も、例によって農村調査部のクラブ紹介を書くハメに陥ってしまいました。

我々のクラブは、毎年一つのテーマを決め、そのテーマに基いて勉強会をし、アンケートを作成し、夏期休暇中に農家に入って実習をしながら調査をし……と、農友会誌を読んだ方が早そうな話はやめにしますが、まあ、この調査実習が、我部の醍醐味と言えましょう。

実習中に、テーマからはなれた農業問題や、時にはその農家の事情が見えたりすることがあります。そして、そこから図らずも農村の実態の様なものも見えてもくるのです。

次に出す文は、ある年の調査実習における、ある部員の実習記です。実習記と言うにはあまりに作りすぎている感もありますが、私には、この文が実習中に得た印象的場面を良く描いている様に思われましたので、手間も省ける事ですし、あえてここに出すことにしました。

本文——

障子の向うで、廊下の窓の雨戸を開ける音に、私は目を覚された。真暗だった部屋に日が射し込んできた。枕元の時計に手をやる。六時三十分。「八時までに起きてくれればいいから」というおやじさんの言葉を思い出して再び眠りに。

次に目を覚すと、時計はもう七時半を回っていた。急いで起き出して洗面所へ行くと、もうおばさんもお婆さんも、台所で朝食を済ませているのが見えた。おやじさんは今起きてきたのか、寝巻き姿で顔を洗っている。

「おはようございます」。

私が言うと、おやじさんはタオルで顔をぬぐって振り向いた。

「あ、おはよう」。

「顔洗ったら、朝飯食べて、ゆっくりしてて」。

おばさんはそう言うと、自分達の食器を片ずけながら、おやじさんと私の分の飯を盛り始めた。こうして、分宿4日目はスタートを切ったのであった。

朝食を済ませ、少し休んでから、八時半頃からおやじさんといっしょに仕事へ。今日の仕事場は、鉄骨三連棟の大型ハウス。四百坪もある広いハウスの中で、おばさんは一足先に仕事を始めていた。トマトの花にホルモン剤をかける「トンかけ」と呼ばれる作業だ。施設の作業というのは簡単だが、その単調な作業を延々とやるものが多い。おやじさんと、おばさんと、三人でこんな仕事をしていると、自然と話にも花が咲く。私の大学生活のことや、一正君（この家の中学二年になる息子）の進路の事が、だいたいその話題の中心になるのだった。

「堀木さん、東京での生活費はどのくらいだい」。

おやじさんが尋ねる。

「そうですね、月に七～八万はかかりますね」。

「そりゃ親も大変だ」。

今度はおばさんが声をかける。

「一正も東京の大学へやると、うちも大変だよ」。

「農大の学費はどのくらいだい」。

またおやじさんが尋ねる。

「初年度が90万、二年からでも年間50～60万位ですか」。

「……」。

「なに、一正も県の農業大学校へ行ってくれればいいよ。あそこなら安いし」。

おばさんが言った。おやじさんは黙ったままだ。

一正君は、あと一年で高校受験なのだ。高校に入ればすぐ大学。私も受験生の立ち場で同じ様な状況を経験したから、おやじさん達の心境が見えてくるようだった。

十時から一時間お茶の時間。近所のおばさんもやって

きて、私から東京の話なんかを聞いてゆく。十一時から十二時まで仕事の続きを少ししてから昼食。昼の仕事は、NHKの『銀河テレビ小説』を見終って一時半から。何ものにも束縛されることのないゆったりした自由な生活。おやじさんやおばさんのおおらかさもその表われのように思われた。

昼からはトマトの茎を吊りヒモにテープで縛ってゆく作業。これも単調な作業だ。だからここでもまた話がはずむ。

「一正も農大くらい出てくれるといいんだが。」

おやじさんが言った。

「農業を継がせるのなら、農業高校へ行かせた方がいいんじゃないですか。農大では、農業の実践的な面はあまり教えてくれませんよ。」

私は思い切って言ってみた。すると、

「そんなことより、大学くらい出てないと相手にされないよ。嫁も来ない。」

おやじさんはちょっとむっとした様に言った。

「農業大学校でもいいや、出てくれれば。でもそれには普通高校へ行かせなくちゃな。」

ああ……。ここでも―学歴―なのだ。学歴がなければ嫁も来ないのか!? しかし、見方をかえると、おやじさんがこうまで学歴を気にせざるをえないのは、やはり農家のかかえる嫁不足問題の影響が色濃くあるからではないのか? 息子を大学に行かせたがる気持ちの裏には、息子に農家を継いでもらいたい気持ちがあるにちがいない。

「でも一正は家を継ぐつもりはあるんだろうか。」

おばさんが言った。

「最近は農家を継ごうなんてせがれは少ないからねえ。」

「そうさなあ。農業ってえのは、若い者にゃ魅力がなさすぎるのかもしれねえな。」

おやじさんも言った。そんな事はありませんよ!! と私は言いたかった。他人に使われる勤めの方が、自分本位に、自由に仕事のできる農業より魅力があるなんてはずがない。しかし、そんな思いも、会社勤めの安定した収入を考えると力なくなってしまう。

一面の田畑の中に農家が点在するこの農村地帯からも、千葉県へならわずか三十分で行くことができるし、都心へさえ一～二時間もあればすべり込む事ができる。隣町では大規模な団地の造成が行われているとも聞いた。他産業収入の機会はいくらでもある。そしてここには、都会の風さえ吹いて来る。夕飯の時、一家でみるテレビのチャンネルは、東京と少しも変わらなかった。

この町の立地条件は、後継者問題という面で見るとこれほどにもきびしいのだ。そしておやじさんやおばさんにしてみれば、間もなくそれが自分自身にもふりかかってくるのだからなおさら深刻だ。

「なぁに、農家がいやだといぃあ、文科系の大学へでもやって、東京の会社へでも就職させるさ。」

おやじさんがきっぱりと言った。

「じゃあ私らはどうすんのさ。」

おばさんが切り返すと、

「おれが働けなくなったら、農地を切り売りしてでも喰いつなぐさ。」

おやじさんは少し大きな声で、しかし少し寂しそうな顔でぽつりと言ったのだった。

三時から四時までお茶の時間、四時からの仕事は、ハウスの向うの倉庫で、乾燥機に入れてあった籾の籾すり。すり終った米を袋につめてトラックに積む。30Kgの米袋は結構重いが、おやじさんはさすがに力が強くて、まるでバスケットボールのチェストパスの様にして放り上げる。そこへ、学校が終って帰って来た一正君が、体操着姿で手伝いに来て、米の袋を私に代ってトラックに積み上げ始めた。

「一正、力が強くなったね。」

見ていたおばさんがほほ笑みながら言った。おやじさんも目を細めて見ている。このまま成長してくれよ、とおやじさんもおばさんも願ったに違いなかった。

仕事が終って作業場の外へ出ると、もう外は暗くなっていた。家へ帰る道すがら、

「一正君、疲れたかい。」

私がたずねると、

「はい、疲れました。」

一正君はていねいな言葉使いで、しかし親しげな笑顔でこう言った。君は将来どうするんだい。私はたずねようと思ったが、それは言葉にならなかった。一正君は軽々とした足取りで、もう私の先を歩いていた。

つけたし――

私がこの実習記を最初に読み終えたのは、故郷へ帰る列車の中でした。実習記が、夕暮れて家へ帰る場面で終ったとき、車窓に広がる景色も、同じく夕暮れて、農家と思われる家々の明りが点々と流れてゆくのでした。

あの見知らぬ一つの明りの中に入っていって、おやじさんと酒を酌み交す……、なんて事は、ひょっとすると今しかできない事かもしれませんよ。あなた。



東京農業大学
農友会 村の会部の紹介ダ!!

農友会・村の会

皆さんコンニチワ！ 我々は農友会・村の会部です。皆さん忘れないように頭にタタキ込んでおいてください。きっと何かの役に立ちますよ。

我々村の会部は農友会文連の中で、その名前だけは少々知られてはいますが、活動内容その他はあまりにも知られておらず〝ピンクのベール〟に包まれている不気味？な存在なのである。そこでこの機会に、一挙に村の会部の全望を一部始終つつみ隠しながら明らかにしてゆきたいと思います。

まず－細かい歴史－

一九五七年 「村に帰って農業をやろう」という農業後継者が集まり、すぐれた農業経営者となるべく勉強が始まったのである（当初は同好会であった）

一九八三年 以上のことが現在の週三回の定例会となって行なわれている。また村の会部の基本方針に変わりはないが、後継者不足がおしよせてきている。

活動内容

前にも述べたように週三回の定例会において、毎年いろいろなテーマにそって勉強してゆき、長期の休みなどを利用して日本各地あらゆる所へ実習に行き、いろいろな形態の農業を見て、からだで感じてみるのである（北海道の雄大でのんびりとした酪農や、山形県寒河江市のサクランボ実習における人とのふれ合いなど、口ではいえないものが得られるであろう）以上のような活動を行なってゆき、十一月には収穫祭で勉強のまとめを発表しているのである。

以上、大変くわしく、コンパクトにまとめてみましたが、まだまだ意味不明の所が沢山あると思います（ゼッタイにある！）その点を知りたい方は、手土産を持って部室まで来てください。その際はお茶を出してあげます。そして歓迎いたします。どうぞ新一年生の方々もふるっていらっしゃいませ。

ピンクのベールにつつまれていた村の会部の全望をさらけ出してしまいましたが、これが本当の話かどうだかも信用していないあなた！あなたですよ、アンタはカシコイ！

記・畜産学科二年 ナベです。

畜友会だより

昭和58年度 畜友会事業報告

1月10日	昭和58年度 畜友会活動開始
1月18日	卒業生送別会（四号館共通実験室）
3月20日	卒業生記念品贈呈
4月15日～16日	新入生学外オリエンテーションにおいて畜友会の説明
4月18日	新入生歓迎会（四号館共通実験室）
5月11日	第一回畜友会ソフトボール大会
6月～7月	夏季個人農場リスト作成及び紹介
6月 9日～18日	第13回学内スポーツ大会参加
6月20日	第13回学内スポーツ大会慰労会（四号館共通実験室）
7月 7日	第一回講演会 ＜石島芳郎教授－牛の受精卵移植実用化の現状－＞
7月15日	第23号「ふじみの」編集委員会発足
8月22日	一年生集中実習において収穫祭の説明（厚木農場）
9月20日	第91回収穫祭畜産学科実行委員会発足
10月11日	収穫祭本部開き（四号館共通実験室）
11月 1日～5日	第91回収穫祭参加
11月27日	第2回畜友会ソフトボール大会（農大グラウンド）
12月19日	昭和58年度 畜友会定期総会

第91回収穫祭畜産学科会計報告

収入の部

畜友会よりの援助金	500,000
前夜祭本部よりの援助金	21,500
体育祭本部よりの援助金	49,000
特別企画本部よりの援助金	38,000
収穫祭本部より北門への援助金	205,000
宣伝隊本部よりの援助金	40,000
計	853,500

支出の部

	予算	援助金	決算
総務費	205,000	0	192,887
北門		205,000	207,721
前夜祭	30,000	21,500	30,419
体育祭	100,000	49,000	101,293
特別企画	30,000	38,000	30,280
宣伝ストーム	100,000	40,000	120,299
文化展	35,000	0	35,000
計	500,000	353,500	717,899

(収入総額) 853,500－(支出総額) 717,899＝135,601 (黒字)

上記相違ない事を認めます。

会計監査委員　4年 冨田晃司　3年 浄慶英志
2年 菅原淳　1年 早川淑浩

昭和58年度畜友会会計報告

収入の部	予算(円)	決算(円)	
前年度繰越金	81,472	81,472	0
会費収入			
新入生 (8,000×180)	1,440,000	1,216,000 (8000×152)	△ 224,000
編入生	28,000	16,000 (4000×4)	△ 12,000
未納会費 (8,000×26＋6,000×3＋4,000×3)	238,000	148,000 (8000×7＋4000×3)	△ 90,000
雑収入	0	40,000	40,000
利息	5,000	3,060	△ 1,940
計	1,792,472	1,504,532	△ 367,940

支出の部	予算(円)	決算(円)	
卒業生送別会費	55,000	50,880	4,120
卒業生記念品費	80,000	37,970	42,030
新入生歓迎会費	80,000	77,199	2,801
「ふじみの」第22号印刷費	400,000	450,110	△ 50,110
ソフトボール大会費	100,000	82,908	17,092
講演会費	20,000	7,100	12,900
夏期実習農場紹介費	5,000	5,600	△ 600
収穫祭説明会費	20,000	21,710	△ 1,710
収穫祭援助費	500,000	510,178	△ 10,178
慰労会援助費	50,000	29,505	20,495
総務費	70,000	72,391	△ 2,391
予備費	412,472	0	412,472
計	1,792,472	1,345,551	526,921

(収入総額) 1,504,532 －(支出総額) 1,345,551＝(残金,次期繰越金) 158,981

上記相違無い事を認めます。

会計監査委員　4年 冨田晃司　3年 浄慶英志
2年 菅原淳　1年 早川淑浩

畜友会を終えて

畜産学科三年　瀬古真一

はじめに

畜友会、他学科はスポーツ大会・収穫祭など、行事がある時だけ集まって、このような会を結成するが、畜友会は随時活動している。毎週月曜日の昼休みには会室に集まり、次の行事の打ち合わせなど話し合い、行事が近付くと毎日集合して、夜遅くまで活動する。

活動資金となる畜友会費の収集にも特徴がある。新入生の時に一年間二千円、四年間合計で八千円をまとめて納入してもらっている。学生への負担も考え、親元へ直接協力をお願いする。この畜友会費は主に、この『ふじみの』印刷費、収穫祭活動費に役立っている。『ふじみの』は他の学生の考え、体験を知り、互いにもっと身近な存在であることがわかる。そして卒業生への何よりの贈り物だろう。収穫祭では他学科では学生から、一人二千円以上ものカンパ金を集めるが、思うように集まらないということだ。畜友会も収穫祭自覚の為にカンパを行うが自由カンパだ。

こんなにお金を使って活動しているのだから、参加しないのはお金を捨てているようなものだ。参加協力しない人、できない人に同情する。

入った理由

そうあれは一年の後期、収穫祭前の畜産学科の団結式だった。その前から内気で消極的な僕は、大学へ行ったら一つでも積極的に参加しようと、行事に積極的（自分ではそう思う。）に参加していた。その団結式で、今はもうOBとなってしまった倉橋さんに口説かれ、畜友会に入った。

とにかく不安をおし隠して自分なりにがんばった。公文書・通知文何十枚も書き、それを各研究室を周り、配布するなど仕事は大変だった。

収穫祭

役員は夏休み中、九月下旬には大学に来て、収穫祭の準備を始める。十月中旬には宣伝パレードがあるから、のんびりしているわけにはいかない。みこし作りがある。まずみこしの骨になる竹取りである。神奈川県まで取りに行くのだが、いつも雨が降ってしまうのだ。取って大学に運んだ後も大忙し、期間に完成させなければならない。

十月中旬のパレードに参加するのは畜産学科と拓殖学科だけで、畜産はニワトリ、拓殖はゴリラを形どっている。毎年一緒であるが知らない人もいるらしい。

二年の時、宣伝委員長になってしまった。一年でかついだときは重かったのなんのって。だからとことん軽量化してしまい強度に欠けてしまい、パレード中に片方の羽根が折れてしまったことがあった。

収穫祭の屋外ステージでの出し物の準備、体育祭のバックボード作り、人集め、まだまだ仕事は多い。

あとがき

行事では収穫祭の事しか書いてないが、この他にソフトボール・スポーツ大会・講演会といろいろ思い出は山ほどあるが、収穫祭での活動が一番苦しく、まだ楽しいでき事だった。

こんな畜友会でも、不満だったことは少なくない。僕は高校は全寮制であった。上級・下級生の差別は、体験した人でなければわからないだろう。挨拶は「オス」。この挨拶が、どうしても気に入らない。「おはようございます」「こんにちは」こんないい言葉があるのに、応援団以外の人にもやたらと「オス」。

それからもう一つ。畜友会は、OB達が苦労してやっと築いてきたものであるが、最近では学生達は畜友会まかせで、だんだん感心が薄くなって、参加人数も減ってきている。飽くまでも自分の考えであるが、畜友会は、納金の管理と、各行事の役員選挙管理委員会だけの存在でなければならないと思う。君はどう思う？

収穫祭を終えて

畜産学科三年　岩下文雄

収穫祭も、今年は91回ということで、100回にむけての基礎をつくるべく、どの学科も張り切っていた。もちろん畜産学科も例外ではなかった。私も、収穫祭に直接参加するのは、今年で最後になるだろうと思い張り切っていた。すると、いつのまにか統一委員長という大役に就いていた。

私達の収穫祭は、毎年恒例とか、マンネリとか言われる、あの鶏のみこし作成から始まった。9月下旬から、約3週間かけて作り上げたみこしは、都内宣伝パレード、経堂パレード、ファイアーストームで大活躍をした。

10月に入り、本部開きを終えてから高まって来た収穫祭気分の中、いくつかの困難を乗り越えて、11月1日、いよいよ本番がやって来た。私達は、毎年参加している前夜祭、特別企画の美人コンテスト、野外劇に参加し、賞こそとれなかったものの、（参加する事に意義がある）それぞれに頑張り、楽しんでやった。私自身としては、Mr・農大というものに出て、「どんじり賞」という、不名誉な賞をもらってしまった。自己満足ではいけないと

思うのだが、自分なりに頑張ったと思う。

5日に行なわれた体育祭では、昨年同様人手不足に悩まされ、結果は良くなかったが、出場してくれた人は、それぞれ精一杯頑張ってくれて、大変うれしく思ってます。ありがとうございました。

さて、いろいろと書きましたが、収穫祭はまわりで見ているよりも、実際にやるほうがおもしろい。どんな小さな事でも、何か自分でやったものがあれば、それだけで収穫祭に対する考えも変わってくるし、次の収穫祭にも参加したいという気になってくるはずです。今まで収穫祭に参加しなかった人や、収穫祭当日、学校に顔も出さなかった人の、来年の収穫祭への参加を切に希望します。そして、来年の収穫祭を成功に導いてくれるものと信じています。頑張ってください。



収穫祭を通して感じたこと

HARU STEWART

畜産学科三年　小池春彦

皆さん、自分は農大に何しに来たのだろうと考えたことはありませんか。ある人は幼い頃から、農大を目指してきたと言います。又ある人は国立や有名大を受けすべり止めで農大を受け、農大しかうからず仕方なく来たと言う人もいるでしょう。そしてとにかくまだ遊びたいが為に、とりあえず腰掛け入学をした人と、十人十色の考えがある。そんな中ただ単に入学、ハイ卒業ではあまりにも寂しいではありませんか。かく言うこの俺もそんな人間の一人でした。収穫祭という大イベントに出会うまでは。

一年の時は収穫祭というと一週間のまとまった休みくらいにしか考えていませんでした。実際最中は学校へは行った事がありませんし、自分でも行こうとも思いませんでした。二年になって私は特別企画の副委員長をやるはめになってしまいました。初めは「だりーな」ぐらいしか思わず、乗り気ではありませんでした。しかし時期が迫っていよいよという時に、俺には珍らしく仏心が出て、役員に任命した人に申し訳がないという気持ちになりなんとか切り抜けました。この時点で俺は二度とやらないと心に誓いました。そして三年目の今年、又々特別企画の仕事に携わることになりました。今度は昨年の様に先輩におんぶにだっこする訳にはいかず、自分達が中心になって進めていかなければなりません。昨年の反省から仕事は早め早めに進めるべきだとスタッフとも話し合い始めるのは早かった。しかし時が絶つにつれて恐れていた中だるみが俺達を襲うのであった。結局気合いが入ったのは昨年と同じ時期でした。その頃にはスタッフ一同殺気だってしまいケンカをする場面もあるほど、みんな一生懸命やりました。なにせ授業熱心な俺でさえ授業そっちのけという一幕があったぐらいですから。毎晩々々夜中までの苦しい日々が続きました。何で俺達だけがこんな思いをしなければいけないのかと思ったこともありました。何の仕事もしないでのほほんと遊んでいる奴を見てぶっとばしてやりたいと思ったこともしばしばです。そんな思いの中収穫祭真っただなかへ突入、ここまで来たら自分達のやってきたことを全部出すしかない。結果はどうあれ悔いを残さないようにという思いだけでした。結果は全学科の中の上でしたが俺達は満足、やるだけやったという気持ちです。それよりなにもやってよかったなと思うのは学科内外を問わず友達が多くできたこと、又今までの友達と同じ仕事をやったことにより信頼を深めより固い絆で結ばれたということです。俺は今おやじの言葉を思い浮かべている「お前を大学へ行かせるのは勉強はもとより、友達を沢山作るために行かしているんだ」。

前にも書いたようにこれで俺はただ入学、ハイ卒業というつまらない人生を送らずにすんだ。もちろん俺のやったことなど、収穫祭全体のごく一部にしかすぎないが自分の思いはそれオンリーで、卒業してからも大学時代の思い出イコール収穫祭となるでしょう。又これから苦しい場面に直面した時、収穫祭当時の苦しさを思い出しこれをのりきればいいことがあるとがんばれるでしょう。

こんなよい思いしか残らなければよいのですが、ただ一つ悔いが残ったことがあります。それはこんな素晴らしいイベントを俺達だけでやってしまったというところです。考えればあたりまえのことなのですが、収穫祭は畜産学科としてやっている訳です。とすれば学科全員に参加する権利があるのです。違った角度から見ると収穫祭は学校が認めた行事です。ならば参加する義務があるのではないだろうか。(すごいこじつけ)ならばなぜごく一部の人の参加しかなかったか。これは非常に寂しいことであり、情けないことです。俺も昔はそう思っていたからあまり強くは言えないのですが、みんな手伝おうとすれば手伝えるのに見ためだるそうだとかめんどくさそうというだけで敬遠するという食わず嫌いの考えに元づいているのだろう。でも前にも書いたようにたしかに苦労かもしれないが、やっただけのことはあると必らず思うのだからどんどん参加してほしい。

家畜苑を終えて

畜産学科三年　福田　洋

気心の知れた仲間が集まって、ゼロから何かを始めることは、簡単ではあるが、顔は知っているがあまり話をしたことが無い者同志が集まって、ゼロから何かを始めることは、たいへん難しいことです。それは、今回の家畜苑にしても同様の事が言えます。各研究室から集まったメンバーは、後者にあたります。そのためか、はじめのうちは集まりも悪く、思うように仕事がはかどりませんでした。しかし、収穫祭が近づくにつれて、一つの目標に向ってみんなの気持ちが一つにまとまってきました。そして、今まで漠然としていたものが、いろいろな面で各個人の才能が生かされ、はっきりした形になってきました。その成果としては、寒い中、深夜までやったり、徹夜をしてまで作りあげた門や、家畜のパンフレットにも現われていたと思います。これらはみんなの協力があってこそできるものだと思います。

収穫祭期間中に私たちが感じたことは、同じ日本と言う国に住みながら東京という大都会の中では、家畜はあまりにもなじみが少なすぎると言っても過言ではないでしょう。家畜は日常生活において、たえず必要なものであり、かかすことのできないものだと思います。それなりに、「私、牛を初めて見たわ」とか、「白と黒の牛が牛乳を出して、赤い牛は、コーヒー牛乳を出すのよ」とか、ガチョウを見て、「ワァー！　あのアヒルさんは、首が長いのね」などと、私たちにしてみれば冗談の様に聞こえるのですが、言っている人たちは真剣なのには、ただただ驚くばかりでした。そもそも家畜は、動物園などでは見ることのできない動物であるためかもしれません。

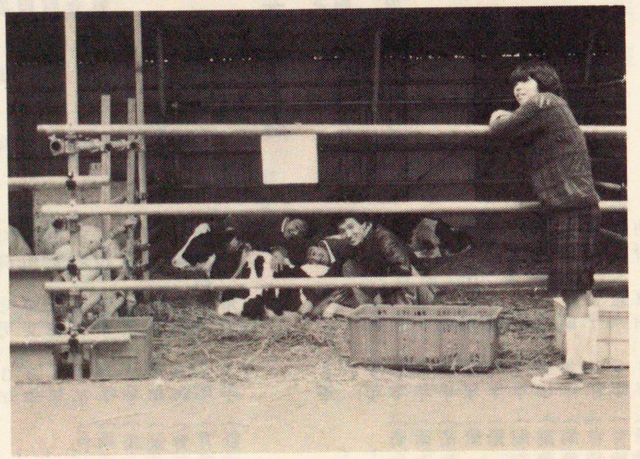
家畜苑に持ちよられた家畜は、同じ農大生でも畜産学科の他は、農場実習に行っている学科あるいは科でないかぎり、あまり見たことがないと思われる厚木農場の水牛を始め、いの豚、日本鶏などや、畜産学科の私達でさえ見る機会の少ない各研究室の実験動物などの集まりである。いろいろな面で家畜苑は、農大の収穫祭において、農大に畜産学科ありと、表明しているようでもあり、畜産学科の団結の強さを表わしているといってもよいと思います。

ただ残念なことは、みんなが交代で泊りこんでいっしょうけんめい世話をしたにもかかわらず、仔豚に風邪を引かせてしまったことです。でも、大きな事故も起きずに家畜を、農場へ戻すことができました。家畜を返した

後には、一つのことをやりとげたという満足感と同時に、言葉で表わすことのできないような悲しみと淋しさが胸の中からわいてきました。収穫祭後は、収穫祭ボケになった人もいたのではないでしょうか。私もその中の一人です。最近になって、ようやく収穫祭ボケがなおってきました。でも今回の収穫祭で私達が得たものはこれらの人生の上でも忘れられないものと思います。それと最も忘れてはいけないことは、仲間のこと、私達をささえてくれた友だち、先輩方、先生のことです。

最後になりましたが、家畜苑委員がいろいろ皆様にご迷惑をおかけしましたことをおわびするとともに、ご協力いただいた各研究室の皆様、諸先生方、馬術部の皆様に心からお礼申し上げます。また、農場の皆様、家畜をお返ししてからいろいろと大変だったと思いますが、これからもご指導いただくよう、よろしくお願いします。皆様どうもありがとうございました。

家畜苑委員長



昭和五十八年度第九十一回収穫祭

畜産学科統一本部役員

○統一委員長	岩下文雄	3年	
副委員長	岩渕守男	3年	
副委員長	伊藤正大	2年	
○前夜祭委員長	瀬古真一	3年	
副委員長	近藤佳人	3年	
○特別企画委員長	鈴木康夫	3年	
副委員長	石井利明	3年	
音響係	小池春彦	3年	
○宣伝隊々長	浄慶英志	3年	
副隊長	増山公一	3年	
○体育祭委員長	坂中昭洋	12年	
副委員長	斉山雅治	12年	
○家畜苑委員長	福田正人	3年	
副委員長兼会計	加藤正人	3年	
○北門アーチ委員長	岩渕守男	3年	
副委員長	福田博文	3年	
副委員長	都築延吉	3年	
○文展模擬店委員長	岩下文雄	3年	
○会計	古橋一人	1年	
○書記	沢田由美	1年	

北門アーチ製作委員

委員長	岩渕守男	3年	
副委員長	福田博文	3年	
副委員長	都築延吉	3年	
会計	安原友和	2年	（乳研）
製作委員	有光由香	3年	（衛生研）
	大友清治	3年	（衛生研）
	細川和人	3年	（飼養研）
	遠藤正幸	3年	（育種研）
	鵜之沢裕美	3年	（育種研）
	石川裕子	3年	（経営研）

家畜苑実行委員

委員長	福田洋	3年	
副委員長兼会計	加藤正人	3年	
製作委員	大羽二見仁和子	3年	（衛生研）
	柿沼潤	3年	（衛生研）
	大久保泰樹	3年	（繁研）
	中川純	2年	（繁研）
	樋渡晃隆	3年	（飼養研）
	松川宮成修	3年	（飼養研）
	宮腰修平	3年	（飼養研）
	渡辺正人	3年	（育種研）
	河野真治	3年	（経営研）
	磯田靖治	3年	（生理研）
	瀬戸喜啓	3年	（肉研）

第九十一回収穫祭

畜産学科統一本部宣伝隊鶏〈みこし〉製作委員

宣伝隊々長	浄慶英志	3年	
副隊長	増山公一	3年	
製作委員	江村裕司	3年	（衛生研）
	榎田克典	3年	（衛生研）
	相内幹浩	3年	（飼養研）
	佐倉秀幸	3年	（経営研）
	深沢映生	3年	（肉研）
	川口岳彦	3年	（繁研）
	対馬都夫	2年	（育種研）



都内宣伝パレード

前夜祭「スパイ大作戦農大編」努力賞

出演者	瀬古真一	3年	（衛生研）
	近藤佳人	3年	（衛生研）
	浄慶英志	3年	（育種研）
	鈴木康夫	3年	（飼養研）
	石井利明	3年	（育種研）
	小池春彦	3年	（経営研）
	佐倉秀幸	3年	（生理研）
	中山昭洋	1年	（肉研）
	古橋一人	1年	

特別企画　総合　第五位「おしん大学編」

出演者	石井利明	3年	
	鈴木康夫	3年	
	小池春彦	3年	
	松浦秀治	3年	
	渡辺由樹	3年	
	鈴木美奈	1年	
	十文字教子	1年	
	山内寿子	1年	

野外劇

出演者

石井利明 3年
鈴木康夫 3年
小池春彦 3年
松浦秀治 3年
瀬古真一 3年
近藤佳人 3年
中山昭洋 1年
古橋一人 1年
福地可奈子 1年

芸能選手権

歌の部

樋渡隆 3年「ぼくの妹に」
岩渕守男 3年「心のこり」
浄慶英志 3年「岬めぐり」
江村裕司 3年「もしもピアノが弾けたなら」
福田博文 3年「約束」
坂斉雅浩 2年「かもめが飛んだ日」
中山昭洋 1年「キャッツアイ」
古橋一人 1年「ボヘミアン」
（音程の狂いが魅力的で賞）

芸の部

石井利明 3年 第三位
鈴木康夫 3年
都築延吉 3年
小池春彦 3年
どんじり賞

M,r 農大
岩下文雄 3年 どんじり賞

Miss 農大
鈴木美奈 1年
土田つかさ 1年

先生のど自慢

一戸健司 先生「フィリピン民謡」
渡辺忠男 先生「ぼくのパパはメキシコ人」 優勝

体育祭

総合 第十一位 第三位

バックボード「畜魂」
設計・製作
坂斉雅浩 2年
伊藤正大 2年
中山昭洋 1年
古橋一人 1年

綱引きの部 準優勝
先生バンザイ 第三位
1/10マラソン 第九位
玉入れ 第五位（第2レース）
農大健児の意気を見よ 第四位（第1レース）
教職員対抗リレー 第五位（第1レース）
仮装行列 第七位
応援合戦 第十二位
マスゲーム 出場

ファイヤーストーム

仮装青山ほとり大会 優勝
みこしコンテスト 第三位

第十三回 学内スポーツ大会結果

総合 第六位

ミニサッカー 一回戦敗退
ソフトボール 一回戦敗退
ハンドボール 一回戦敗退
バスケットボール（男子） 第四位
（女子A） 第四位
（女子B） 一回戦敗退
バレーボール（男子） 準優勝
（女子A） 一回戦敗退
（女子B） 一回戦敗退
軟式テニス（団体） 二回戦敗退
硬式テニス 二回戦敗退
剣道 予選リーグ敗退
相撲 第三位
卓球（団体） 二回戦敗退
中川進 4年 第三位
工藤達也 3年 三回戦敗退
福田洋 3年 三回戦敗退

昭和五十八年度畜友会役員

顧問 柴田寛三 教授
顧問 古川徳 講師

委員長 岩渕守男 3年（飼養研）
副委員長 岩下文雄 3年（飼養研）
副委員長 伊藤正大 2年
会計 古橋一人 1年
企画 坂斉雅浩 2年
書記 沢田由見 1年
渉外 中山昭洋 1年
庶務 近藤佳人 3年（飼養研）
会計監査 冨田晃司 4年（飼養研）
会計監査 浄慶英志 3年（飼養研）
会計監査 菅原淳 2年
会計監査 早川淑浩 1年



体育祭 応援合戦

東京農業大学畜産学科
〃畜　友　会〃　規約

第一章　総　則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称す。

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会　員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。

一、正会員

二、特別会員

三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　本会は左記の役員をおく。

一、委員長一名、副委員長二名、書記二名
会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名

二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名

三、監査員四名

本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第七条　一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。

第八条　二、第六条第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
（なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。）

三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならない。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条　一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。

三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。
但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。

四、委任状の検査は役員が行なう。

五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条　定期総会は年一回十二月に召集する。
臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章　業　務

第十七条　第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第十九条　本会は左記の業務を行なう。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

三、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　計

第二十条　会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。
但し入学取消しの場合はその限りではない。

第二十三条　決算報告は十月末日までに作成し公示する。
承認は定期総会において行なう。

畜友会選挙規定

第一章　総　則

第一条　この規定は、畜友会役員の選挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条　この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員の選挙に適用される。

第二章　選挙管理委員会

第三条　第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）

第四条　本会は、畜友会役員の選出に関して全ての権限を有する。

第五条　本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高点を当選とする。

第六条　本会の委員の任期は原則として、畜友会の事業年度に準ずるものとする。

第六章　監　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。
監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　則

第二十七条　本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

第七条　本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならない。

第八条　畜友会規定第十六条によって、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員の選挙を行なう。

第三章　選　挙

第九条　選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条　一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会の決するところによる。
二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一条　選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならない。

第十二条　選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三条　選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十四条　選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五条　投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ)　投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。
(ロ)　投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。
(ハ)　代理投票及び不在者投票は認めない。
(ニ)　投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。
(ホ)　投票場は選挙管理委員会が定める。

第十六条　開票は全投票終了後、ただちに行なう。

第十七条　開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十八条　左記の投票は無効とする。
(イ)　正規の投票用紙を用いていないもの。
(ロ)　立候補者以外の氏名を記入しているもの。
(ハ)　選挙管理委員会が不明と認めたもの。

第十九条　畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十条　当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一条　立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二条　選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三条　選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四条　選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があってもこれに応じなければならない。

第四章　予算及び監査

第二十五条　畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六条　選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章　改　正

第二十七条　本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八条　本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九条　本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

編集部では〝ふじみの〟第二十四号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間　五十九年九月～十一月下旬

要　項　。論文、随筆、紀行文、主張
四〇〇字詰～十枚以内
。写真カット、は随意
。表紙図案、三色以内

宛　名　東京都世田谷区桜丘一―一―一
東京農業大学畜産学科内
畜　友　会
ふじみの編集委員会行

発行日　昭和六十年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会〝ふじみの〟
編集委員会
TEL（四二〇）二一二一(呼)

編集後記

今年で〝ふじみの〟も23号を発行することができ編集員一同嬉しく思っております。

我々編集員一同は、皆様方に御満足して戴くようにさまざまな企画を豊富にとりそろえ発刊した次第でありますが、いかがでしたでしょうか。至らない点は、今後一層努力してゆく次第であります。

最後になりましたが、この場を、おかりしまして原稿を頂きました学内・学外の諸氏、諸先輩に感謝すると共に、今後とも「ふじみの」及び畜友会への変わらぬ御理解と御支援、御協力をお願い致します。

編集員一同



昭和59年3月1日発行

〝ふじみの〟第23号

編集責任者　福田博文
発行者　岩渕守男

発行所　東京都世田谷区桜丘1－1－1
東京農業大学畜友会
電話（420）2131（呼）

印刷所　世田谷区経堂1－6－13
エルデ・タイプ社
電話（429）1067

毎度ありがとうございます

★ 日替りサービス定食　400円
★ やきそば　200円
★ 各種定食　300円より

コンパ
弁当も
承ります

農大一高正門前

キッチン ニシモト

TEL 429−0578

建築金物，　日曜大工用品
各種塗料，砂利，砂，園芸用品
セメント，コンクリート製品 etc

稲毛屋商会

世田谷通り拓銀隣り　TEL 426−0505〜6
工場 TEL 420−1913

皆様の食堂

清潔な設備
低廉な価格　明るいホール

農大食堂

電話 420−4116

歓迎会・部会・クラス会等に御利用下さい

松木家

渋谷円山三業会館隣
電話 (461)2651
(476)4471

酒類・食料品

おりべ酒店

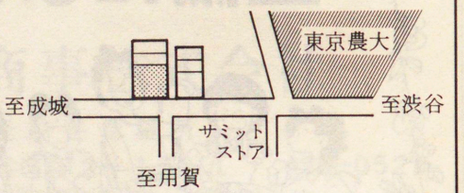
東京農大北門前

電話 420−0359

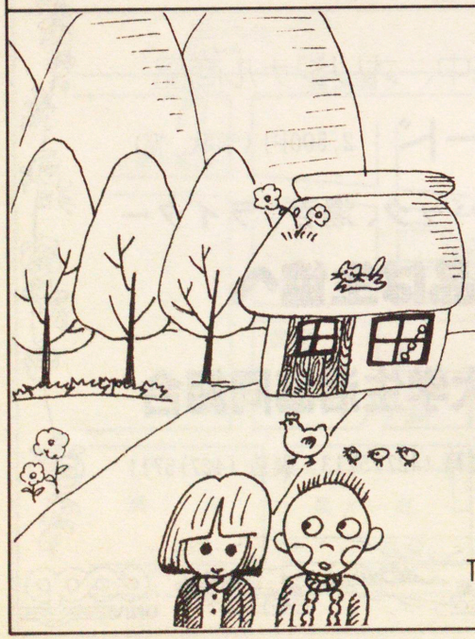
Liquor & Wine shop

KADOYA

和・洋 酒
国産＆輸入タバコ
菓子・つまみ
その他



3－24－1 Sakuragaoka
Setagaya Tokyo ☎ 429－5175



昼ランチ
夜 パブタイム
ボトルキープ
日本酒，ワイン
ウイスキー，梅酒

茶味家

ちゃー みー はうす

TEL 420－3484

MOS BURGER



THE MOST DELICIOUS HAMBURGER

モスバーガー
世田谷
桜町店

理科学機器から家電製品まで
何でも御相談に応じます

科学機器設計製作販売

テザキ SCIENCE CO.,LTD.

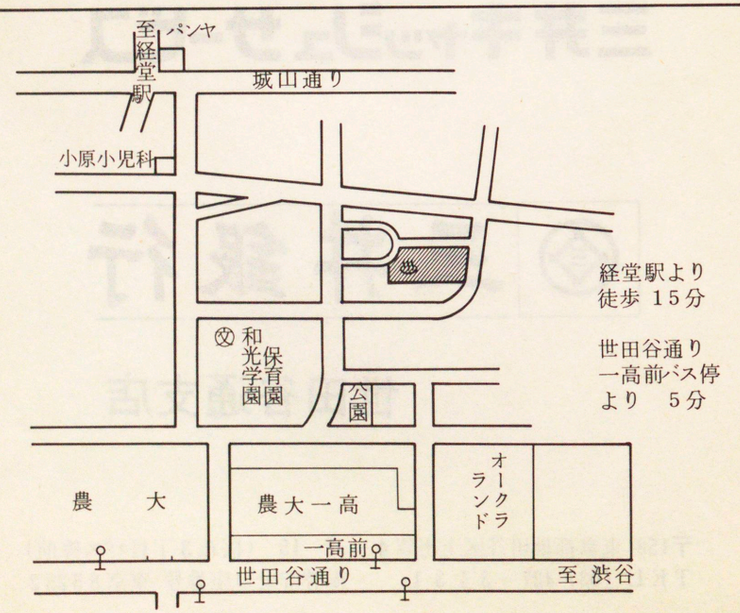
テザキ科学機器株式会社

〒110 東京都台東区下谷２丁目23－5
TEL（873）9019番 取引銀行 富士銀行鶯谷支店

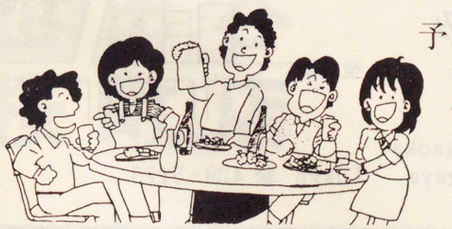
風呂屋　（有）神　仙　湯
世田谷区桜２－15－16　420－3726

材木屋　（有）丸　美　木　材
世田谷区桜２－15－1　428－0521

不動産　東京商事株式会社
世田谷営業所
世田谷区桜２－15－1　428－0521
代表取締役　深　美　博　之



入学・卒業の記念の時に
研究室、クラブ、サークル、県人会に
コンパのことは
生協にまかせて



予算は相談にて
生協グリーン
西村まで

好評!!　発売中、オリジナル商品
農大レコード　2,500円（学歌、等）
トレーナー、バック、湯呑、ライター
記念品は生協へ

東京農業大学生活協同組合
購買（427）5715　書籍（427）5713　製造（427）5711



東京農業大学の取引銀行として最も
ご縁の深い三井銀行をご利用ください

★カードで出せるスピード窓口



1,000円きざみでお金がだせる

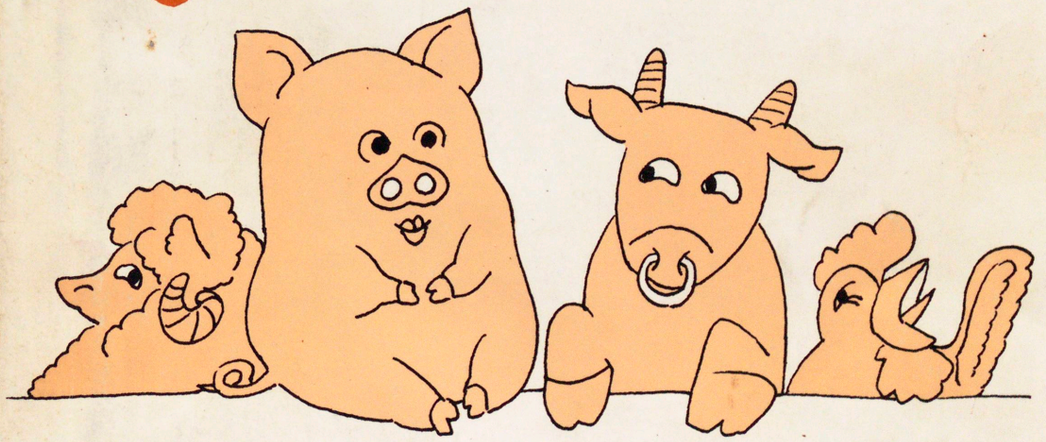
三井キャッシュサービス

三井銀行

世田谷通支店

〒158 東京都世田谷区上用賀４－35－15 （桜丘３丁目バス停前）
ＴＥＬ（03）427－３１３１　　振替貯金口座番号 東京８５２５２

CHIKUSAN



FRESH!! MO~MO~